キキとあほうとにゃ

びふう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キキとあほうとにゃ

【Ｎコード】
Ｎ９３７５Ｘ

【作者名】
びふう

【あらすじ】
え、俺がやるのか？　ええと、どうも、喜衛喜々（きえいきき）ことキキです。この物語は二人の少年が異世界へと飛ばされ、大活躍して大活躍して大活躍するお話です。なんだ、これは。書き直せ、あほうが。

キキ＋あほう＝キキの危機（前書き）

この物語はフィクションです。

キキ＋あほう＝キキの危機

残念な男前とはどこの学校にも一人はいるものだ。
それは俺の通う学校も例外ではなく、世代を越えて女性うけするやつが一人いる。ただし、黙って突っ立っていれば、という注釈つきだ。
そいつはとにかく問題を起こす。口を開けば意味不明なことをほざき、何かアクションを起こせば大なり小なり周囲の者に迷惑という名の被害をおよぼす。まったくもってはた迷惑なやつである。
俺はもっともそいつの被害をこうむっている人物だ。残念なことに、そいつとは幼稚園からの付き合いであり親友と呼べてしまう仲である。もしもタイムマシンが開発されたなら、俺は栄えある一番めの使用者となることだろう。
そいつ、金子鳶春（かねことびはる）ことトビが時代を先取りし過ぎた感性で何か行動を起こすたびに後悔をする俺ではあるが、今以上に後悔をしたことがない。
なぜなら――――
「どうやら冒険の始まりらしい。オレが、この世界を、、救うっ！！」
隣のあほうが世界の壁を越えたからからだ。

◆

夏休みも残り一周間となったある日、俺はトビが強引に貸し付けてきたゲームをプレイしていた。ジャンルは恋愛シュミレーションというやつで、異世界を舞台に女の子との恋愛を楽しむといったものだ。

暇だったのでとりあえずプレイしていたわけだが、どうにも、俺の趣味には合わないのでそろそろ止めようと思いゲーム機の電源を切ろうとしたとき、あいつがやってきた。
なんの前触れもなく開け放った窓から、アクロバティックに。
ちなみに俺の家は庭付き二階建ての一軒家であり、自分の部屋は二階になる。
「ようキキ！」
部屋に入ってくるなり、トビは慣れ親しんだあだ名で俺を呼ぶ。
「わざわざ庭の木をつたって入ってくるな、あほうが」
言いつつゲーム機の電源を切ってベットに腰掛けた。
「わかってないな、お前は。突然の訪問ってのは意表をついてなんぼだろうが」
「お前は絶対セールスマンにはなるな」
「セールスマンになんかならないっての。セールスマンになるんだったらＮＡＳＡの職員になるっての」
なれると思ってるのか、こいつは。
「そんなことよりだ、面白い話を仕入れてきたんだよ」
「またかよ……」
トビは心霊現象や埋蔵金といった眉唾物（まゆつばもの）な話が好きで、噂話やネットなどで情報を拾ってきては真相を確かめに行きたがる。もちろん、俺をまきこんでだ。
「今度のはかなり信憑性があるんだ。訊いてくれ」
訊きたくはないが、こいつの場合は訊くまで催促をしてくるため、全身全霊を込めて嫌そうに訊いてやることにする。ささやかな抵抗である。
「どんな話だ？」
「言うかボケ」
よし、殺そう。
「そんな怖い顔すんなって、ジュピタージョークってやつだ」
木星ジョークらしい。こいつ死ねばいいのに。

「で、話だけどよ。なんでもな、夜中の二時から三時のあいだに鏡乃神社で魔法陣を描いて呪文を唱えれば異世界に行けるんだってよ」

行けるわけないだろうが。この話のどこに信憑性があるというんだ、こいつは。

「だから今日の一時半に現地集合な」

俺が行くの決定かよ。もしもトビに一般常識が通じるのなら、俺は限界突破２００％で断るところなのだが、あいにく目の前で喜々としているあほうに一般常識は通じない。したがって、

「……わかった」

と返事をするしかないわけだ。

「よし、決まりだな。じゃあまたあとでな！」

キラッと歯を輝かせて男前スマイルを見せるあほう。トビはそれだけいうと来たとき同様に窓から出て行った。

「あいつ、約束を取り付けるためだけに来たのか」

このクソ暑い中、それだけのために直接出向いてくる意味が分からん、っていうかメールで済むだろうに。まあ、別にいいんだが。

そんなことを思いつつ、俺は夜中という時間帯に備えるため、しばしの眠りにつくことにした。

◆

鏡乃神社は地元で一番の規模を誇り、また、古い歴史をもつ重要文化財である。そのため、鏡乃神社には落ち武者が出るだの旧日本兵が出るだのと胡散臭い話が尽きない。去年の秋には猫耳をした人間が出たらしく、一部の層で話題になっていた。というか、猫耳だったら人間ではなくて妖怪だろうが。と思いながらトビに猫耳探索を手伝わされた後悔の秋。

去年のことを思い出しているうちに鏡乃神社に到着。鳥居周辺で

は十数人の不良っぽい人たちが呻きながらころがっていた。
「可哀そうに」
おそらくトビに絡んでいって返り討ちにあったのだろう。トビに絡むやからがまだいたとは思わなかった。間庭市のキチがい、金子鳶春と言えば関東では有名なんだが。
ころがっているやつらを後目に、俺は無駄に長い石段を登って行く。夜中で視界が悪く、慎重に歩を進めてようやく境内へとたどり着いた。
境内の中央ではトビが何らかの液体を地面にばらまいていた。取りあえずトビに近寄っていき声をかける。
「トビ」
「キキか、遅かったな」
「しっかり間に合うように出てきた。で、何をしてるんだ？」
「魔法陣を描いてる。ペンキで」
「……お前、ペンキを消す道具は用意したのか？」
「用意する必要なんかないだろ。せっかく描いたものをどうして消すんだよ」
こいつ凄えよ、重要文化財だとかおかまいなしだよ。神社に魔法陣を残していく気まんまんだよ。
「それにだ、オレたちは異世界に行くんだから消すの無理だろ」
異世界とやらに行くこと前提で考えてらっしゃるよこの人、誰か良い病院を知りませんかー？
「っし、完成」
俺が脳内突っ込みをしているうち、どうやら魔法陣とやらが完成したらしい。トビは持っていたペンキを魔法陣の外に置いた。
「これからどうするんだ？」
「魔法陣の中央で呪文を唱える。安心しろ、呪文はすべてオレが創ってきたからよ」
創ったのか凄いなあほうだな。
「ああそう。じゃあ頑張れよ」

言って俺はトビから離れようと踵(きびす)を返す。
「まてまて、どこに行く気だ。お前も魔法陣の中央に行くんだよ」
「俺にも呪文とやらを唱えろっていうのか？」
いくら俺たち以外に人がいないとはいえ、そんな恥ずかしいことはごめんだ。
「唱えるのはオレだけだ。異世界に行けるのは魔法陣のなかにいるやつ……っぽいだろ？」
そもそも行けないっての。というか訊かれても困る。
「わかったから服を引っ張るな。中央に行けばいいんだな」
「おう」
何が『おう』だ、あほうが。そしてトビと並んで渋々と中央へと移動。
「じゃあ始めるぞ」
「はいはい。さっさと済ませてファミレスに行くぞ」
「異世界にファミレスは無いだろ」
現実世界の話だっての。異世界に行けると信じて疑ってないな、こいつ。
横で呪文という名のキチがい詠唱を聞かされつつ、俺は胡坐(あぐら)をかいて座る。さて、ファミレスで何を食べようか、などと考えているとだ。

風がでだした――――

夏だというのに、頬をなでる風は妙にひんやりとしている。
ざわざわと音を発て、木々が騒ぎ出す。
降りそそぐ月明かりが強くなった、気がした。
胸騒ぎがする、嫌な感じだ。思ってゆっくりと首だけを巡らせる。
がらん、、がらん、、賽銭箱の後ろに吊るされている鈴が風に揺れていた。

ただ揺れているだけ、それだけだ。それだけなのに、鈴の音が、俺には不気味に聞こえた。

なんだかおかしい、言葉にはできないが、とにかくおかしい。

頬を舐める風が、ざわざわと鳴いている木々が、がらんがらんと響く凶音が、不気味に輝く月が、無駄に俺の不安を煽り、掻きたてる。

「……おい……トビ……なんだか様子がおかしい」

つぶやくと立ち上がり、トビに目を向ける。そして異常事態なんだと、俺はようやく理解した。

トビはまるで生気の感じられない瞳でぶつぶつと聞いたことのない言語をつぶやいていた。俺はトビの両肩をつかみ、揺すって必至になって呼びかける。

「トビっ、おいトビっ！！！！」

反応はない。

「しっかりし――」

瞬間、周囲に光が満ちだした。トビの描いたでたらめな魔法陣の中が、まぶしいまでに光っている。

そして、満ちた光は閃光となって弾けた――――――

そのとき、人影を――――

◆

「で、気づいたらだだっ広い草原でした。ってか……」

草が穏やかな風になびくなか、俺は、どうしてこうなったと今までの行動を振り返っていた。周囲を、「オレは勇者だ！　いヤッホーイ」と嬉しそうにあほうが飛び跳ねるなか、俺は頭を抱えて今世

紀最大のため息をついた。いや、人類史上最大のため息かもしれない。
「よう兄弟、宇宙規模のため息なんぞついてどうしたよ」
「誰が兄弟だ、殺すぞお前」
「あれ、怒ってる？」
「怒ってない。とんでもないことになったと嘆いているんだ」
「そんなことよりよ、腹減ったから何か食おうぜ」
そんなことだと……？　わけのわからん場所に飛ばされたってのに、こいつにとってはそんなことなのか。ああもう、ほんと殺したいわこいつ。
「なあ、キキ」
「なんだよっ！」
「なんかトラみたいなのに囲まれてるぞ」
「え……？」
いつの間にか、緑色の犬歯の長い、トラに良く似た動物に周囲を囲まれていた。お腹が空いているのか、ぐるぐると低いうなり声をあげている。
「あれだな。モンスターだ、きっと」
詰みましたっ、本当にありがとうございますぅ！！！！！！！！！！！　いえアアアァアアアアアア！！！！！！！！！！！

1－（1）　キキ＋あほう＋少女＝タイトル

「何を悶えてんだ、キキ」
そりゃあ悶えるだろうがっ、わけのわからん別世界に飛ばされたあげく、腹を空かせた緑色のトラみたいなのに周囲をかこまれてるんだからよ！！
「前から思ってたんだけどよ、お前って追い込まれると錯乱するよな」
「黙れあほうっ、全てお前のせいだろうが！」
「人のせいにするなよ」
お前のせいなんだよぉぉぉぉ！！
「落ち着けってキキ。グリーンタイガー程度、オレが返り討ちにしてやんよっ」
「……お前、俺が逃げるまで囮（おとり）になれよ」
「なるほどな。オレが囮になっている間にお前が逃げるってわけか。さすがは智将キキだ」
いや、そう言っただろうが。どうして繰り返したんだこいつは。というか智将とか止めてほしい。
あほうが意味不明なことをほざいてる間もグリーンタイガーどもは包囲をじりじりとせばめていた。
「トビ、そろそろ来るぞ……」
「だな」
一歩、また一歩と、呻り声は迫ってくる。
正直、生きた心地がしない。間違いなく、俺とトビは食い殺されてしまうだろう。しかし、だからといって無抵抗でやられるつもりはさらさらない。
ごくりと、俺は生唾（なまつば）を下す。
結果は目に見えていても、あきらめない。それが俺とトビだ。
握ったこぶしに力が入る。

「なあ、キキ」
「なんだ？」
トビが俺に背中を合わせる。
「オレさ、生き延びることができたら二組のゆりちゃんに告白するよ」
それ、死亡フラグや。
あほうの死亡フラグに反応したのか、ついにグリーンタイガーどもが動き出す。長い牙をきらりと光らせ、雄々しく大地を蹴り、一斉に飛びかかってきた。
「死んでたまるかーー」

◆

少しばかり時をさかのぼる。

鏡乃神社で金子鳶春が呪文を唱えだしたころ、一人の少女がそれに気がついていた。正確には膨大（ぼうだい）な魔力の奔流（ほんりゅう）を感じ取ったのだ。
眠っていた少女は押しつぶされそうな感覚にたまらず飛び起きる。
「これは……」
近い。それも、かなり。思うが早く、少女は布団をはねのけて大きめのベレー帽を被ると家を飛び出した。
わき目もふらずに少女は駆ける。速い。中学生とは思えないほどに。
あの時と同じだ、また、門が開こうとしている。行かないといけない。
ふと、少女の頭を親代わりたる好々爺の暖かい笑顔がよぎった。
郷愁の念に胸がしめつけられる。少しばかり走る速度が落ちた。
ごめんなさい、おじいさん。でも、ミーニャは行かないと。

少女は下唇を噛むと想いを振り切るかのように決意の表情をつくり、走る速度あげた。
いくつか珠の雫が、夜風にのっていた。。

少女にとって鏡乃神社は良くも悪くも思い出深い場所であり、また、学校が終わると毎日来ていたため、見慣れた場所でもあった。
しかしながら、こんな異常な雰囲気を醸し出す鏡乃神社を見るのは初めてだった。
「何よ、これは……」
鳥居の前から見る神社は魔力が渦巻く危険地帯となっていた。まるでコントロールされていない魔力は、誰かが張ったであろう強力な結界を壊さんばかりに叩き、のた打ち回っている。
もしも魔力が結界を破って外に出てしまったならば、魔力耐性の低い人間族では、最悪、死に至るかもしれないと彼女は恐怖する。事実、鳥居周辺でころがっている者達はすでに意識がなく、危険な状態であった。
「なんとかしないとっ」
少女は心を奮い発たせる。震える足を無理矢理に動かし、神社へと踏み入る。
とたん、飢えた猛獣のような魔力が彼女を襲う。
お気に入りのベレー帽が吹き飛び、舞い上がり、敷地内を無秩序に乱れ飛ぶ。しかし今はベレー帽などに構っている暇はない。少女は風に目を細めつつ、鳥居周辺で気絶している人を助けだすよりも先に、原因をどうにかすべきだと判断をした。
いくら強力な結界が神社に張られているとはいえ、一人一人を助けていては結界がもたないだろうと考えたのだ。彼女の判断は正しく、すでに結界の限界は近かった。
心中で気絶している人たちに謝ると同時、無事であることを祈りながら彼女は輝く境内を目指す。風にはばまれながらも、彼女は石段を駆け上がる。そして、

境内へと辿りついた彼女は目にする。
輝きが閃光へと変わる瞬間。
異世界へと来てしまった自分を、救ってくれた、キキと呼ばれていた少年を――――

荒れ狂っていた風が穏やかなものへと変わりつつあった。ゆっくりと、高密度の魔力が霧散していく。
境内には少女が一人。先程まで境内の中央にいた少年たちの姿はそこにはない。
ペタンと、その場に少女は座りこんでしまう。胸が高鳴っていた。茫然自失とは、今の彼女の状態である。
間違いない、あの人だ。一年前のことを思い出し、カッと顔が赤くなる。胸の高鳴りはいっそう大きくなっていた。
からんからんと、甲高い鈴の音が少女の耳に入ってくる。それで、はたと我に返った。
なにをボーっとしているんだ、こんなことをしている暇はない。思って彼女は立ち上がり、つい先程まで想い人が立っていた中央へと足を運ぶ。
「魔術陣……？」
お昼に来たときにはこんなものはなかったはずのに、と不思議におもいつつそれを観察してみる。
「凄い、なんて高度な魔術陣なんだろう」
魔術に詳しくないとはいえ、少しばかり心得のある彼女は感嘆のつぶやきを洩らした。もはやそれは魔術の域を超えた魔法陣とよべるものだった。魔術を極めた者だけが行使できる最上の術が魔法である。
まさか、魔術すら存在しないこの世界に魔法を使える人がいるなんてと彼女は思う。
少女の元いた世界ではともかく、こちらの世界には魔術師や魔法使いなどはいない。ただ、でたらめに描いたものを魔法陣としてし

まう奇跡的な阿呆はいるが。
「……陣が残っているのなら」
戻れるかもしれない。元の世界に、そして、あの人を助けないと。
決意をし、すっと目を閉じて集中をする。足りない魔力はいまだ周囲で霧散せずに残っている分で補うとして、、して、、、どうしよう、世界を渡る魔法の詠唱なんて知らないよっ。
うにゅうー、などと彼女は妙な呻き声を洩らす。
するとだ、唐突に彼女の呻きが途切れた。
そして彼女は唱えだす、知らないはずの呪文を。
世界の壁を超える魔法を。
まるで、何者かに操られているかのように。

1－（2）

◆

「死んでたまるかぁぁぁぁ！！！！」

四方から跳びかかってくるグリーンタイガーに対し、俺は雄叫びをあげながら立ち向かう。

「と見せかけてスライディングっ」

完璧なるフェイントをかまし、跳びかかってきたやつらの下を滑りぬける。真正面から戦うとか馬鹿のすることだしな。グリーンタイガーの後ろをとった俺はすかさず態勢を整える。そして見た。そして知る。

「うらうらうらうらあーー！！」

信じられないことに、トビがグリーンタイガー一頭の前足を掴んでジャイアントスイングをかましていた。その様はさながら旋風であり、次々と周りにいた猛虎たちは吹き飛んでいく。どうやらあほうはグリーンタイガーを装備したらしい。

「相変わらず出鱈目（でたらめ）なやつ……」

というかだ、俺がスライディングをせずに迎撃をしていたら、俺もジャイアントスイングに巻き込まれていたのではなかろうか？

「しゃあっ、オレ無双！！」

ああ、そうだな。無双し過ぎて味方すらやっちまうところだったけどな。トビに投げ捨てられて矢のように飛んでいく哀れなグリーンタイガーを目で追いつつ、俺はそんなことを思っていた。

「よっしゃあああ、次にブン投げられたいやつはどいつだあああ！」

うざいテンションだな。というか他のやつらは吹き飛ばされたあとに逃げたっての。

「やる気まんまんなところ悪いんだがな、お前の敵味方関係ねえ無

双のおかげでグリーンタイガーどもは撤退したぞ」
「マジか」
「ああマジだ」
「追うぞっ」
「まてまてまてっ。どうして追う必要がある」
今にも駆けださんとしていたトビの肩をつかんで制止する。せっかく追い払ったというのに、自ら危機に足を踏み入れる必要はない。
「逃げられたら経験値が入らないだろ？」
なんというゲーム脳。ついにリアルとゲームの区別がつかなくなったようだ。
「残念なことにだ、グリーンタイガーを倒しても経験値は入らん」
「そんな馬鹿な」
安心しろ、お前はあほうだ。
「というかキキ、これからどうするよ」
どうしてあほうやバカってのは、こうも簡単に話題を変えるのか。まあ、経験値うんぬんの話を引っ張られても困るのだが。
さて、本当にどうしたものか。さきほど襲ってきた地球外生命体、いや、別世界生命体を見る限り、俺とトビは異世界に飛ばされたと仮定してしかるべきだろう。そのように仮定した場合、やはり元の世界に帰ることを目標にしたい。グリーンタイガーみたいな怪物がいる世界にいては命がいくつあってもたりないからな。
「なあキキ、取りあえずどっかで飯食おうぜ」
どっかってどこだよ、あほうが。なんにせよ、こちらの世界の住人とコンタクトをとるべきだな。
「言葉が通じるといいんだが……」
人間でなくともいいので、最低でも意思疎通ができることを祈ろう。
「おい、聞いてんのかキキ」
「聞いて」
言い終えようとしたとき、俺は視界のなかに浮かぶ光の珠に気が

付いた。どうやら光の珠は俺たちの足元から立ち昇っており、素っ気ないただの草原を幻想的なものへと変えていた。

「なかなか綺麗だな」

トビは周囲に浮かぶ光の珠を見つつ、のんきにそんなことを口にした。俺としては、今度はなんだ、また何か起きるのかといささか呆れていた。

光の珠が強く輝きだす。

まぶしさのあまり目を細めてしまう。次に輝きは閃光となり、俺は目を開けていられなくなった。

「っっ！」

「光ってるっ、オレ、すげえええ光って、えええええるううううう――――」

そして閃光は弾け飛んだ。一緒にトビも弾け飛べばいいのに。

などと至極当然なことを思いながらも、強烈な光の波が過ぎ去ったのを感じた俺はゆっくりとまぶたを上げた。と、横のあほうが叫び出す。

「イギャアアアアアアアア！！　目がっ目がああああああ！！！！！」

見ると、あほうは手で目を覆い、草の上をもんどりうっていた。何を思ったのかは知らんが、察するに閃光を直視したのだろう。

前々から分かってはいたが、やはり救いようのないあほうだ。しばらくは何も見えないだろう。それだけならばまだいい、最悪の場合、失明しているかもしれない。

まあ、どうでもいいことだ。

そんなことよりもだ、まずは状況の把握だ。閃光が弾ける前と後で変化したところがないかと思い、周囲の状況を確認してみる。何者かと、目が合った。

「……」

そいつは立っていた。何をするわけでもない。ただ、茫然（ぼうぜん）と突っ立っていた。

少女だった。肩までの鮮やかな金髪、その前髪が風に靡いている。
吸い込まれそうなまでの綺麗な瞳。蒼と紅の、オッドアイ。
桃色の小さく瑞々しい唇が言葉を紡ごうとする。しかし言葉は紡がれず、閉じられた。
「うお、耳付いてる」
行き成りだった。トビが俺の肩越しから言い放った。どうやら俺はボーっとしていたらしく、その一言に驚いて少しばかり身体を弾ませてしまった。
「当たり前だろ、人間……なんだ……から……」
頭に何か付いとる。猫耳のような……
「ヘイ、そこの猫耳彼女っ！　オレ今、目が逝ってて色の識別できないけどお茶しなぁい？」
かっる！　そしてナンパ文句が斬新過ぎる。というか、どうして猫耳が付いているんだとか、いつの間に居たのか、だとか気にならないのかアイツは。
「すっごいねえ、それ地耳？」
地耳ってなんだ。初めて聞いたわ。
「え、その、」
「さわるから」
まさかの断定。さすがはトビ。
「にゃっ！」
トビに耳を触られ、驚きの声をあげる猫耳少女。
「マジか、地耳だ。なんか、でも、引っこ抜けそうだな」
「うにゃあっ」
ぐいぐいと耳を引っ張るトビ。猫耳少女は半泣きになっていて、今にも本泣きしそうだった。というか、にゃあにゃあと少女がうるさいので、トビを止めることにする。
「トビ、手を離してやれ。いい加減にしないと泣くぞ、その子」
「泣かれると嫌だな、わかった」
言ってトビは耳から手を離す。無茶苦茶なやつではあるが、トビ

は女の子を泣かせて喜ぶような悪人ではけっしてない。俺は二人に近寄る。

「あうあう……」

情けない声を出して耳をさする少女。あうあうて……こいつぶりっ子じゃないだろうな。

「なに？　このリアル萌え少女」

「知るか」

それにしても猫耳とはな。俺たちの世界にこんな珍妙なものは存在しないので、十中八九こちらの世界の住人だろう。

「あんた、この世界の住人だよな。色々と訊きたいことがあるんだが、いいか？」

少女は俺の問いかけに対し、ボーっと俺を見つめてくるばかりでいっこうに答えない。もしかしたら言葉が通じていないのかも知れない。ここは異世界だ、有りえないことではないし、むしろ、その可能性のほうが高いといえる。

「言葉、通じてるか？」

改めて訊いてみる。すると、少女はうるうると瞳を揺らし始め、両の手を豊かな胸の前で合わせ、なぜか、感極まった声でこう言った。

「優しく……してほしいにゃ」

こいつ気持ち悪い。

1―(3)

初対面の人に向かって優しくしてくださいとか、なんなのこいつ。何を求めてるんだこいつは。

「大胆なやつだな。よし、犯るかキキ」

「犯らん、あほう」

まったく、これだから万年発情期のあほうは。

「あ、あのっ！」

トビに呆れていると、ぐいっと行き成り身を乗り出してきた少女。って近い近い。

「ありがとうございましたですにゃ！」

お礼をのべるなり、今度は勢い良く頭を下げる。もう、俺にはなんのことやらさっぱりだ。どうして初対面の女の子、それも異世界の猫耳少女にお礼を言われているんだ俺は。

「キキってこの猫耳と知り合いなのか？」

「そんなわけないだろ、間違いなく初対面だ」

猫耳の少女になんか出会っていたら忘れたくとも忘れられるわけがない。例え痴呆症になったとしても覚えている自信がある。

「あのさ、俺はあんたに優しくしてくれだとか、ありがとうだとか言われる理由がないんだけど。誰かと勘違いしてないか？　そもそも、俺とあんたは初対面だろ？」

少女はゆっくりと頭を上げ、俺の顔をジッと見る。しばし凝視したあと、少女は口を開いた。

「あなたで間違いないですにゃっ、向こうの世界に行ってしまったミーニャを――」

「ちょおおっと待てっ」

俺の耳が確かなら、いま、目の前で首を傾げているやつは、向こうの世界に行って――などと口にしたか？

「あんた、俺と同じ世界からこの世界にきたのか？」

「あ、はい。でもミーニャは、もともとはこの世界の住人なのですにゃ」
「つまり、俺たちの世界に行ったあと、こちらの世界に戻ってきたということか？」
「そういうことになりますですにゃ」
少女の言うことが本当だとしたら、この世界には世界間を行き来する何らかの方法が確立されているのかもしれない。もし、そうならばこれ以上の朗報はない。なにせ、簡単に元の世界に帰れるのだから。
「この世界では世界間の行き来する方法が確立されているのか？」
期待を胸に訊いてみる。
「されてませんですにゃ」
即答されました、どうもありがとうございました。
「おいキキ」
「なんだよ、くだらないことなら後にしてくれ」
「オレ、なんか空気じゃね？」
くだらねー。
「頼むから少し黙っててくれ、トビ。今は猫耳少女と大事な話をしてるんだ」
「あの、」
トビをかるくあしらっていると、おずおずと少女が口をはさんできた。
「近くに、こっちの世界で住んでいた家があると思いますので、そこでお話をしませんかにゃ？」
「それは助かるが、思いますって、また曖昧なんだな」
「ご、ごめんなさいですにゃ。もう、一年ちかく帰ってないので…」
ああそうか、俺の元いた世界に居たんだもんなと納得。とりあえず、落ち着ける場所で話をできるのはありがたい。
「それは助かる。あんたさえよければ、是非にお願いしたい」

「はいっ、こちらです、着いてきてくださいにゃ」
何が嬉しいのか、満面の笑みで言うなりくるりと背を向けて着いてくるようにうながす少女。
「しっぽついとる」
少女の腰あたりでフラフラと左右に揺れるしっぽ。それにトビは好機の視線を向けている。
「トビ、掴むなよ」
「え、ダメなのか？」
「ダメだ。触りたいのなら家に着いた後で了解を得てからにしろ」
「うむ」
なにがうむだ、あほうが。

俺とトビは草原を歩きつつ、この世界について少女に色々と質問をしていた。例えば、『この世界で日本語は通じるのか』『通貨はあるのか』『中心となっている技術は何か』などである。これらの質問に対し、俺は簡単な答えしかもらっていない。詳しくは家に着いてから訊くつもりだ。
今はトビが質問をしていて、『胸でかいな、何カップ』とくだらないことを訊いていた。そのあいだ、俺は彼女に訊いたことを自分なりにまとめていた。
この世界は『魔術』技術というものが発達しているらしいが、社会通念などは俺たちの居た世界とはほとんど変わらないらしい。科学の変わりに魔術、という程度のものなのだろう。したがって、通貨の概念は当然のように存在し、生きていくためには労働をしてお金を稼ぐか、作物や狩りをして糧（かて）を得なければならない。まったく、どこの世界も世知辛（せちがら）いものだ。
それと、言語に関しては種族間で違うらしく、当然のように日本語は通じないとのことだ。猫耳少女に日本語が通じるのは、彼女が日本に住んでいたからに他ならない。ただし、言語に関しては魔術道具でどうにかなるらしい。俺たちの世界でいう翻訳機のような物

があるのだろう。
「キキ、キキっ、キキ！」
訊いた話を整理していると、トビが俺の名前を連呼しているのに気が付く。どうにも、集中していたらしい。
「大声を出すな。で、なんだ？」
「着いたって」
「ん？」
言われて今更ながらに気づく。目の前に木造の小屋が建っていることに。
「……随分（ずいぶん）と綺麗だな」
一年ちかくも空けていたというのに、小屋とその周辺は妙に整然としていた。綺麗に磨かれた小屋、短く切りそろえられた草、手入れのいきとどいた花壇……どう見ても人の手が入っている。
「うお、見たことない花がある」
少年のようにきらきらと目を輝かせ、窓下の花壇へと向かっていくトビはほおっておき、不思議そうに小屋を見つめている少女に声をかける。
「猫耳少女」
「にゃ？」
「あんたの家ってのはここで間違いないのか？　一年ちかく帰ってないにしては手入れがいきとどいているみたいだが」
「その、はずなんですけどにゃ……」
はて、と少女は首を傾げる。別に不思議がることはないと思うんだがな。少し考えれば、留守にしている間に誰かが住み着いたと予想がつきそなものだが。
「あんたが家を空けている間に誰かが住みついたんじゃないのか？」
「そうなんですかにゃ？」
いや、知らないけど。
「お、なんか居る」
ふとトビが声が発したと思うと、間髪もなく、ガッシャアン！

などというガラスの破砕音が響き渡った。俺と少女は反射的に音の方角へと顔を向けた。
「キキ。なんか捕まえたぞ」
うっれしそうに言葉にするトビ。見ると、あほうが花壇の上に備え付いていた窓ガラスを粉砕し、中に手を突っ込んでいた。どうやら、窓ガラスをぶち破って中に居た何かを、もしくは誰かを捕まえたらしい。
「ほんと、ろくなことをしないなお前は」
「まあな！」
褒めてないっての。どんだけポジティブなんだよ。
「にゃにゃ、窓が！」
どんまい、猫耳少女。
「離せー離せー！」
と、いやに可愛らしい声が小屋の中から聞こえてきた。声の感じからするに、トビが捕まえたのは女の子らしい。なんだか犯罪の臭いがする。
「おお。この虫しゃべるぞ、キキ」
虫……だと……？
「この声……」
「トビ……とりあえず捕まえたのを見せてくれないか？」
「おう」
きゃっ、という小さな悲鳴と同時に出てきたもの、トビの手に握られていたそれは。
なんかもう、生物？　精霊？　なんというか、妖精？
妖精って……。

1－（4）

「リーリエちゃんっ」
っと、呆けている場合じゃない。トビに足を掴まれ、ぷらんぷらんともがく妖精を見るなり、少女は妖精へと駆け寄って行った。
「この虫、猫耳のか？」
「あたしは虫じゃないやい、妖精族のリーリエなの！　それより離してよっ」
「トビ、離してやれ」
「ん、わかった」
返事をするなり、パッと手を離すトビ。おかげで妖精は地面にキスだ。痛そうだな。
「い、痛い……」
小さすぎる手で鼻をこりつつ、妖精は少女に顔を向ける。そして、
「ミーニャあ！」などと甘々な気持ち悪い声をだして彼女に抱き着いた。
「よしよし、大丈夫かにゃ？」
しゃがみこみ、優しく頭をなでる少女。俺はなでられている妖精をまじまじと見てしまう。
大きさは小学生の低学年ほどであり、一見すると人間のようではあるが、背にはトンボのような四枚の小さな羽が付いている。
髪の色は黄緑色っぽく、髪型はボリュームのある髪をサイドでまとめた、サイドポニーテールとなっている。顔は良く整っており、リンゴほっぺが特徴的だ。美幼女？　って部類に入るんだろうな。
いかんな、なんだかロリコンみたいではないか、俺は。
「……うん。それより、今までどこに行ってたの？　ミーニャが居なくなってから、凄い大変だったんだからぁ」
あっーと、会話の流れから話が長くなる予感がする。
「大変だったって、街で何かあったにゃ？」

「うん。あのね、」
さて、悪いが遮らせてもらうか。このまま置き去りにされて話を進められると非常に困る。
「ああっと。悪いんだがな、ひとまず中に入らないか？」
「え、あ、はい。そうですにゃ」

中に入った俺たちは少女にうながされるがまま、手作り感たっぷりのちゃぶ台に着いた。少女はいま飲み物を入れてくれている。
「すっげ、ＲＰＧの民家みたいだ」
辺りを見回しつつ、トビがそんなことをつぶやいた。トビの言う通りで、家の中は中世ヨーロッパのような雰囲気が漂（ただよ）っており、ほとんどの物が木で出来ていた。プラスチック製の物は一切なく、鉄製の物は調理器具といったごく一部にしか使われていない。この世界で鉄は貴重なのかもしれない。
「ねえ」
部屋を見渡していたら、俺の隣りでちょこんと座っている妖精に話しかけられた。大きくつぶらな瞳がジッと見ている。
「なんだよ」
「ミーニャのお友達なの？」
「そんなところだ」
俺の適当な返事を聞いた妖精は何やら考え事をし、「ふーん」と言って正面を向いた。
「ねえ。あの乱暴者もミーニャのお友達なの？」
しばらくして、タンスを漁るトビを指差してまたもや話かけてきた。
「ああ」
まとめて訊けよ、めんどくさいな。
と、飲み物を運ぼうとしていた少女がトビに気づいた。トビは綿で出来た簡素な女性下着を手に、「あれ、パンツちっせえ」などとつぶやいている。

「ねえ。リーリエも……」
隣りでもごもごと言いよどんでいる妖精を無視し、俺は、真っ赤になった少女とトビのパンツ綱引きを見ていた。「何をしてるんですかにゃ、返してくださいにゃ！」むーむーと、必死になってトビから下着を取り返そうとしている少女。対するトビは、「なあパンツくれよこのパンツくれよ」と余裕の表情で最低なことを言っている。
見ていて面白いので、しばらくそのままにしておく。
「――だからね、リーリエとも、お友達になってほしいの」
ふと、隣りから遠慮がちな声が耳に入ってきた。見ると、うつむき加減で妖精がいじいじと床にのの字を書いている。ずっと俺に話してかけていたみたいだが、俺が聞き取ったのは友達うんぬんの件（くだり）だけだった。
何を言ってたんだろうかと思い、妖精を見ていると、妖精がちらりと俺を盗み見た。そして。
「リーリエいい子だから、お友達になるといいことといっぱいあるのにな……」
またもや、ちらりと俺を盗み見る。
そんなアピールいらないっての、めんどくさいやつだな。
「わかったから、ちらちらと見るな」
「お友達になってくれるのっ」
「ああ、なってやる」
「ありがとう、リーリエはリーリエって言うの！」
「ああそう。喜衛喜々だ、呼ぶときはキキで頼む」
「うんっ」
にぱーっと満面の笑みで笑うリーリエ。どうもやりずらい。改めて、俺は子供が苦手なんだと思い知ったよ、まったく。
「あ、千切れた」
パンツ綱引きに動きがあったようだ。トビのつぶやきに、視線をそちらへと戻すと下着は見事に引きちぎれて二つになっていた。引

き千切れたときの勢いだろう、少女は家具に頭をぶつけている。なんとも間抜けなこって。

「ということはアレだな。片方はオレがもらっていいってことだな」

なぜ、そうなる。どんだけ下着欲しいんだエロあほう。

「痛いにゃ……うう、ミーニャの下着が」

「大丈夫なのか、ミーニャ！」

慌てて駆け寄るリーリエ、そして彼女は少女を庇うように前に出ると、精一杯の怖い顔をつくってトビを睨みつける。

「乱暴者めっ、ミーニャに謝れ！」

「なんだ、やる気か虫娘？」

トビの一言に、はうっ、と小さな悲鳴をあげるリーリエ。最初の勢いはどこぞへと消失だ。

「リーリエ、すごい強いから、やめておいたほうがいいと思うなあー……」

視線は明後日の方向へ向けつつ、そんなことをのたまうビクビク妖精のリーリエ。

「強いってどれくらいだ？」

あほうが喰いつく。

「ド、ドラゴンくらい……」

基準がわからんっての。

「マジか、すげえな！」

なぜだ、なぜ架空の存在を比較対象にされて、すげえなんて言葉が出てくるんだ。お前がドラゴンの何を知っている。

「待てよ？　お前を倒せばオレはドラゴンを倒したことになるんだな……」

いやいやいや、ならないって。

「そ、そうなる」

いや、ならないって。自分から死亡フラグを建ててどうするよリーリエ。あほうが次に言いそうなことなど予想がつきそうなものだがな。

「決めた。お前を倒し、オレは勇者になるっ」
リーリエ＝ドラゴン＝悪の親玉、討伐＝勇者、どうやらトビの頭の中ではそう結びついたらしい。人類の理解を超えていやがる。予想の遥か彼方だ。
「まままま待て」
焦りまくるリーリエ。もう少しだけあほあほコントを見ていたい気もするが、これ以上トビをほおっておくとリーリエがフルボッコにされるので幕を下ろしてもらうことにする。
「楽しんでるところ悪いんだが、そろそろ話し合いをするぞ」

1－(5)

「あ、そうですね。すぐに飲み物を持っていきますにゃ」
今までリーリエとトビのやり取りをぽかんと見ていた少女が立ち上がる。
「うむうむ、乱暴者と戦うのは後だな！」
「キキ、話は虫娘を倒してからでいいか？」
ひぃ、などとまたもや悲鳴をあげ、小走りで俺の背に身を隠すリーリエ。トビもそうだが、リーリエもめんどくさいことこのうえない。
「ダメだ。あまり言いたかないが、おれとリーリエは友達だからな、ケンカは無しだ」
「マジか」
「マジだ」
「ラスボスとダチとか、キキすげえな」
何がラスボスだ、あほうが。ほんと疲れる。
「まあな、お前も友達になっとけ」
「お前の友達はオレのダチだろうが」
なに、そのジャイアニズム、どこの剛田さん？
「なんと、リーリエと乱暴者はすでに友達だったのか！？」
もうめんどくさい、こいつらめんどくさい。
「らしいな。お前みたいなラスボスとダチになれるとは、公園だぜ」
公園じゃなくて光栄だ、遊びに行ってこいあほう。
「うむ。お友達ならば仲良くせねばな。リーリエはリーリエ、よろしくな！」
「オレはトビって呼んでくれなっ」
「お友達が増えて良かったにゃ、リーリエちゃん」
柔和な笑みを浮かべて言うと、少女は飲み物が入った木製カップを手際良くテーブルに並べていく。

「うむ！」
うっさいな、人の耳元で大声出すなっての。
「リーリエ、座れ」
「うむ」
たたたと駆けて空いている場所に座るリーリエ、その隣りに、飲み物を配り終えた少女が腰を下ろす。トビは俺の隣りで足を投げ出して寝転んでいる。
ようやく話し合いの場が整ったというところだろう。
「ああそうだ、まずはあんたの名前を聞いておきたいんだが」
ずっと気にかかってはいたのだが、俺は少女の名前を正式には訊いていなかった。まあ、ミーニャミーニャと連呼していたので名前じたいは知っているんだが。
「あ、はい。ミーニャですにゃ」
顔を赤くし、うつむき加減で答えるミーニャ。照れてるのか？
「まあいいや、俺は喜衛喜々、寝転がってるのが金子鳶春。呼ぶときはキキとトビで頼む。ところで、苗字はないのか？」
「この世界で苗字を名乗れるのは貴族様だけですにゃ」
貴族ときたか。苗字によって貴族とそうでない者を区別、、いや、
「あまり苗字を名乗らないほうがいいか？」
「……はい、お察しの通りですにゃ」
とどのつまり、この世界は貴族制度による身分差があり、区別ではなく差別が行われているということだ。
差別ということは、この世界は貴族が取り仕切る社会制度だと容易に想像がつく。ミーニャの苦笑を見る限り、貴族がそうでない者を虐げ、得をする世界なのだろう。
吐き気がしやがる。
「キキとトビは貴族なのか……？」
大きな瞳に不安の色を乗せ、リーリエが訊いてくる。フルネームで名乗ったはずなのだが、どうやらリーリエは苗字に気づかなかったようだ。

「そんな顔をするな。確かに俺たちには苗字があるが、貴族じゃない。勝手に苗字を名乗っているだけのあほうだ」
別に異世界から来たことを隠すわけではないが、好奇心旺盛（こうきしんおうせい）そうなリーリエにそのことを話すと質問の嵐にあいそうなので、そういうことにしておく。
「……本当？」
「ああ。だよな、ミーニャ」
「は、はい。リーリエちゃん。キキさんはとっても良い人だにゃ。怖がらなくても大丈夫」
「うむ……」
リーリエは随分と貴族に酷い目にあわされたらしく、ミーニャに抱かれ、今にも泣きそうな表情となっていた。
「お前、貴族ってのに何かされたのか？」
寝転がったまま、トビがリーリエに訊いた。
沈黙が場を満たす。
しばしの間を得て、嗚咽（おえつ）が洩れ出した。
「リーリエちゃん……街で、何かあったんだね？」
ミーニャに抱かれた腕の隙間から、こくりとうなずくリーリエが見えた。
「リーリエ、妖精属で珍しいから。領主様が欲しいって……無理に連れて行こうとして……でも、街の人たちが守ってくれて、、逃がしてくれた」
「そう、だからミーニャの家に居たんだにゃ……」
「ずっと一人で寂しかった、街のみんな、すごいすごい心配だったけど、リーリエ、、本当は弱っちいから、行けなかった」
そう、たどたどしく口にしたリーリエ。止めどなく落ちる雫、それは、彼女の寂しさと悔しさ、なにより、街の人を思う気持ちであふれ返っていた。
寂しかったからこそ、彼女は俺なんかでも友達を欲（ほっ）したのだろう。
守られるだけで何もできなかった自分が悔しかったからこそ、彼

女はミーニャを守ろうとトビに向かっていったのだろう。
いじらしいことだ。仕方ない、話し合いは中断だ。
「街とやらに行くぞ」
俺は立ち上がりつつ、口にした。
「キキ……でも……」
リーリエは街に戻るのが怖いんだろう。分からなくはない、なぜなら、リーリエを逃がしたことで街の者がどのような目にあったのかなど、言うまでもない。自分のせいで街の者に辛い想いをさせてしまったのだ、嫌われたと思うのが普通だろう。
けどな。
「でも、じゃない。怖がる必要はない。みんなお前が無事なのか心配しているはずだ」
街の者はリーリエを逃がしたことにより辛い目に合うことは分かっていたはずだ。そんなのは覚悟のうえで、クソ貴族のクソ領主に刃向ったに違いないのだ。もしもそうじゃ無く、戻って来たリーリエに罵声を浴びせるやつがいるとしたら、そいつはただのクズだ。
「リーリエが戻ったら、また、街のみんなに迷惑がかからない……？」
「かかりゃしないって。え、何故かって？　俺がクソ貴族のクソ領主をフルボッコにするからな」
「ダ、ダメですにゃ、貴族様に手を出せばこの世界で生き辛くなってしまいますにゃ！」
そんなことは百も承知だ。街のやつらの後のことを考えれば、とんでもない最悪な行動だということも理解している。でもな、そんなことは『後』でどうにかしてやるよ。
「知ったことか、友達を泣かせたままのほうが生き辛いんだよ、俺は」
まずは泣いている友達を笑顔にするのが先なんだ。
「キキさん……」
「完全にスイッチが入っちまったな」

トビがむくりと起き上がり、こきりこきりと首を鳴らす。
「やるか、キキ」
「当たり前だ。ミーニャ、案内だけでいいから街に連れて行ってくれ。頼む」
真っ直ぐにミーニャを見つめ、あらん限りの気持ちを瞳にのせた。
少しして、
「キキさんは、もっと落ち着いた方だと思っていましたにゃ」
「イメージ違いで悪かったな。どうにも、俺は子供らしくってな」
「というかキキはあほうだ」
トビにあほう言われると腹が立ってくるな。クソ貴族の前にこいつをフルボッコにしてやろうか。
「でも、お優しい方ですにゃ」
慈しむような、なんか、そんな笑顔で彼女は言った。凄い背中がかゆくなる。
「リーリエちゃん。街に行こうか」
ミーニャの問いかけに対し、リーリエに全員の視線が集まる。
「……でも、」
「でもはいらない。何もかも、俺たちがどうにかしてやるから。リーリエがすることは、もっとも難しい、友達を信じる、ということだけだ」
まったく、なんというくっさいことを言ってるんだ、俺は……
「……うん。みんなを、信じる」
泣き腫れた顔で、彼女は遠慮がちに、だが、確かに、笑った。

1―(6)

◆

これは、とある老人の語りである。

オルベールの街は大草原のど真ん中に位置する田舎町で、昔からさびれた街だった。しかし、前任の領主、オルタ・ラーセンによって街は活気ある栄えた街に変わった。

オルタ・ラーセンは元は王都所属の貴族であり、無階級層、つまりは平民を第一に考えて政策を執る親民派といわれていた。真面目で慈悲深く、また、その政治手腕は他の貴族よりも頭一つ抜きん出ていた。

そんな彼が田舎街に赴任(ふにん)することになったのは、なにも、オルベールを活性化させるためではない。他の貴族に疎(うと)まれていた彼は、謀略によって王都を追い出され、オルベールへと左遷(させん)されたのである。

しかし彼は腐(くさ)らなかった。

オルベールに着くやいなや、まるで活気のない街を嘆き、積極的に街の者と関わりをもって町興(まちおこ)しを始めたのだ。

敏腕のオルタをもってしても、特産物もなければ観光名所もない街で金を生み出すのは難しかった。けれども彼は諦めず、どうにかできないかと日々、頭を抱えていた。

そんな時だった。ふらりと、妖精がやってきたのは。

妖精属が人前に姿を見せるのは珍しく、ここ数百年では目撃例すらなかった。オルタはすぐ、宿で保護されている妖精に会いに出向いた。

妖精は幼(おさな)かった。オルタを見た妖精は駆け寄っていくと、開口一

番、こう言った。「リーリエ、いい子だからお友達になると良いことといっぱいあるなあ……」と。その日、妖精はオルタの友人となった。

妖精は無邪気で心優しく、誰よりも笑顔が似合う可憐な子だった。彼女は街の者に可愛がられ、愛されていた。また、彼女も街のみんなが大好きだった。

ある日、彼女は街の人々のために何かできることはないかと、オルタに相談を持ちかけた。

街のみんなに恩返しをしたい、みんなに喜んでほしい。あまりにも純真無垢な想いに、オルタは渋々、「みんなのために見世物になる気はあるかい？」と告げた。良く意味の分かっていない幼い友人のため、彼は噛み砕いて説明をする。

話を理解した妖精は寸分の迷いもなく、満面の笑みで、「みんなが喜ぶのなら見世物でもなんでもするぞ！」と、返事をした。

その後のオルタは凄まじいものがあった。住民に彼女の想いを伝え、街の者と一丸となって行動を始めた。

まずは私財を投げ売って街と王都をつなぐ街道の整備を行い、次に夜盗や魔物対策のため、獣人族に街道の警備を頼み込んだ。獣人族は人間族よりも身体能力が高く、戦闘に長けた種族であり、ゆいいつ人間族に友好的な種族である。

獣人族の協力もあり、街道の安全が保障されると、オルタは王都や各地の街から商人を呼び寄せて妖精の存在をさり気なく見せつけた。オルベールの街から帰った商人たちにより、瞬く間に妖精の存在は大陸中に広がり、オルベールの街は観光客であふれ返り、宿や酒場といった店が大繁盛し、街の者が総出で作ったリーリエ人形が飛ぶように売れた。

これにより、オルベールは活気に満ちた豊かな街となった。

しかし、栄華は長くは続かなかった。

突如、オルタ・ラーセンが領主の任を解かれたのだ。獣人族との独断交渉の責を問われ。

オルタ程の男に抜かりはない。街道の安全強化を名目に、しっかりと王都より許可を得てから獣人族の協力を取り付けており、許可状も持っていた。だが、オルタの目覚ましい活躍を快く思わない貴族たちによって、彼の持つ許可状は偽造とされた。金と、権力がものをいう社会なのだ、この世界の貴族社会は。

オルタは領主の任を解かれただけでなく、苗字をも剥奪された。貴族にとって苗字の剥奪、それ、すなわち、平民になるということだ。

オルタの後任に着いたのは、ゲローブ・ランセンというごく一般的な貴族だった。一般的、つまりは無能で強欲ということである。

ゲローブは欲した。妖精を、コレクションとして。

街の広場、そこで妖精はいつものように街に来た観光客と遊んでいた。彼女にしては遊びだが、それは街の催しの一つで、キキたちの世界でいうところの鬼ごっこである。皆が楽しそうにしているなか、そこに、ゲローブ率いる騎士団がやってきた。

剣を携え、重厚な鎧を纏った騎士団と貴族たるゲローブの登場に、場は一斉に静まり返った。重々しい空気が流れる中、妖精はゲローブへと駆け寄り、「一緒に遊ぶのか？」とにんまりと満面の笑みで問うた。

答えは、蹴りで返ってきた。

ゲローブは妖精の腹部へと蹴りをみまい、「気安く話しかけるでない、物は黙っておれ」と吐き捨てた。騎士団に命ずる、一言、連れて行けと。

妖精はなす術もなく、髪を無造作に引っ掴まれ、痛い、痛いと、悲痛な声をあげている。誰も助けには入らない、うつむいて地面を見るばかりである。貴族に逆らっては命に係わる、離せと言おうものならば、国家反逆罪として一族郎党打ち首となる。ましてや、戦闘訓練をうけた騎士たちに平民がかなう訳もない。

例え子供が痛みと悲しみに泣きわめいていても、どんなに愛らしい子であっても、貴族がすることには口を挟まないのが賢い生き方

なのである。
ただ、どこの世界にも馬鹿は居るものだ。
オルタ・ラーセン、いや、オルタは馬鹿だった。彼は広場の出口で、たった一人、ゲローブたち騎士団の前に立ち塞(ふさ)がった。貴族の頃に召(め)していた立派な衣服は簡素な布でできた服へと変わり、腰に帯びていた家宝の剣(つるぎ)は今やなく、手に握られるは鍬(くわ)である。彼に貴族の面影はどこにもなかった。
ゲローブは笑う。醜悪(しゅうあく)な顔をさらに歪ませ、肥えた腹(はら)を愉快気に叩き、かつて、やり手の貴族として名を馳せた男を。
オルタは叫んだ。ゲローブの笑い声などかき消すほどの声で、たった一言。
「友よっっ、いまっ、助けるぞ！！！！！！！！！！！」
騎士団を相手に、彼は鍬を手に立ち向かう。ゲローブを無視し、一目散に妖精を掴む兵士へと襲いかかる。瞬く間に場は騒然となった。騎士団は咄嗟(とっさ)に迎撃(こころ)を試みるも、邪魔が入った。
オルタは苗字を剥奪され、そのさいに財産も失った。
しかし、彼を慕う民の心までは、失ってはいなかった。
オルタ様を護れと、リーリエを助けろと、その場にいた街の者が理性の介入よりも早く、身体が動いたのである。
大乱戦のさなか、妖精は街の者の手によって、草原の監視小屋たる、獣人族のミーニャの家へと逃がされた――――

◆

「なんて言ってんの、このじじい？」
「俺に訊くなよ」
いま、俺たちはリーリエが以前住んでいた街に来ており、そこで出会った老人に家へと招かれ、なんか良く分からん話を聞き終わっ

たところ……だと思う。感じ的に。
言葉が分からない、というか、言語が違うので何を言っているのかさっぱりだ。この世界の住人たるミーニャとリーリエには通じているらしく、ミーニャはリーリエを抱きしめて辛そうな顔でなにやら声をかけていた。
「やっべ、ミーニャが何を言ってるのかも分からなくなっちまった」
「安心しろ。俺もだ」
「安心した」
早いな。

1－(7)

ミーニャ、リーリエ、老人を見ながら、俺は疑問に思っていた。
ミーニャと老人の会話はまったく意味が分からないのだが、不思議なことに、何故かリーリエの言葉だけは理解できたのだ。しかも、リーリエの言うことは全員が理解できていた。これは、おかしなことである。
ミーニャはともかくだ、俺とトビが理解できる言葉を老人が理解できるわけがないのだ。
「なあ、ミーニャ」
「kjfdぎう？」
気持ち悪うう、何言ってんだこいつ。
「あのさ、俺とトビはこっちの世界の言葉が分からないんだが」
「あ、そうでしたにゃ」
そう言うとミーニャはちろっと舌を出した。かっわいいなあ。
なんてことは思わない。純粋に殺してやろうかと殺意が芽生えた。
「萌えー」
トビは相変わらず気持ち悪い。
「少し待っていてくださいにゃ」
言うなり、彼女は何やら老人と二三言葉を交わす。老人は席を立つとタンスの中から小さな小瓶を取り出し、そして席に戻って来た。
「精霊の雫だ……」
小瓶（こびん）の中に入った虹色の丸薬を見て、リーリエがポツリとつぶやいた。小瓶をミーニャが受け取り、中から二粒とり出すと俺とトビに差し出してくる。
「これは精霊の雫というもので、これを呑めばどのような言葉も理解できるようになる秘薬ですにゃ」
なに、その便利アイテム、理屈抜きっすか。貴方は未来からやってきた猫型ダメ人間製造ロボットですね。ええ、分かりますとも分

かりますとも。
　とか、どうでもいいことを思いつつそれを受け取り、まずはトビが呑むのを待つ。なんの警戒心もなく、トビが呑みこむ。トビの体に変化はない。
「じじい、何か食い物をくれ」
　口の悪さはこの際ほおっておくとして、トビの言葉が通じたかどうかが問題だ。
「ｊｄにぬｒげうげｊ、ｌｋｇｇ」
　老人が何か言った。気持ち悪い。
「分かる……わかるぞ、オレにもこの世界の言葉がっ！」
　よし。いつも通りのあほうだ、呑んでも問題なさそうだな。俺も思い切って呑みこむ。
「……じいさん、俺の言葉が分かるか？」
「うむ。よう聞こえておる」
　よしよし、これで言語に関する問題はクリアできたな。さっそく質問といくかね。
「なあ、じいさん。この街の領主ってのはどこにいるんだ？」
　俺の言葉を聞くなり、老人はあからさまに渋い顔をした。それだけで、ここの領主が嫌われているということを感じた。
「領主館におるが、ゲローブになんの用かね？」
「領主館ってのは、どんな建物だ？」
　老人の質問を無視し、続ける。
「この街で一番大きく、立派で醜（みにく）い建物じゃ。大通りの突き当りに建っておる」
「わかった。精霊の雫といい、貴族の居場所を教えてくれた事といい、感謝するよ」
「もう行くのか、キキ」
「ああ。飯は現地調達だ」
「おっけ。楽しくなってきた」
　俺とトビは席を立つ。そして俺が玄関扉を開けようとしたとき、

老人に声をかけられた。
「まだ、質問の答えを訊いておらんが」
ゲローブになんの用かって？　なに、たいした用事じゃない。ただの高校生がガキみたいに暴れるだけだ。要はさ、
「ムカつくから、ぶん殴ってくる」
そういうことなんだよな。

◆

「ほほう。随分と分かりやすい理由じゃ、若いとは良いのう。して、ミーニャちゃんとリーリエちゃんはどうするのかね？」
老人は自慢のあごひげをゆったりとしごきつつ、二人に問う。
老人の問いは酷な質問である。この世界でミーニャは獣人族の街道警備員であり、貴族との揉め事は人間族と獣人族の友好関係に係わってくる。つまり、外交問題となり、最悪の場合は戦争になってしまうということだ。
それはリーリエにとっても同じだ。彼女は妖精族であり、妖精の捕獲というゲローブの暴挙はオルタによって食い止められ、内々にて彼が処理をしたため、妖精族との外交問題には発展しなかっただけの話だ。
無論、長い月日を生きてきた老人はそれを理解している。そのうえで、キキとトビをほおっておくのかと問うたのである。
「ミーニャは……」
力なく垂れ下がった耳からは彼女の葛藤が窺える。
キキの友人を想う気持ちに胸を打たれ、彼女はこの街にキキとトビを案内してきた。けれども、今更ながら、それは間違いだったのではないかと思う。
貴族を相手にするということは、この世界で最大の勢力を相手に

するも同義である。ましてや、領主館は騎士団の一個小隊が警備をしており、たった二人で勝てるような安い相手ではない。

その場の雰囲気に流され、自分はとんでもないことをしたのではないだろうか。どうして、もっと強く止めなかったのだろう。これでは、二人を死地に連れてきたのも一緒ではないか。

「ミーニャ、大丈夫？」

気が付けば、彼女を心配そうにリーリエが覗き込んでいた。

「あ、うん……リーリエちゃんは」

コンコンと、丁寧なノックが扉を鳴らした。

コン、さらにもう一度、ノックが鳴った。

「ふむ」

突然の来訪者に対し、老人は扉を開け、その来訪者を迎え入れる。

中へと入ってきたのは、目深にフードを被った長身の男だった。

男には左腕がない。

「……これは、驚いたな」

男はミーニャとリーリエを見るなり、数瞬固まったあと、そう洩らした。

「久しぶりだね、ミーニャ君。それと、我らが街の友人よ」

言って男はフードを取る。

「オルタさん！？」

「オルタ！！」

◆

ピーピーと笛の音が鳴り響く。

いやさ、俺としてはだ、気に食わないクソ貴族のクソ領主をフルボッコにしようと思っていたわけだ。お偉いさんの居る場所だから警備もいるだろうとは思ってた。でもさ、まさか本物の騎士が居る

とは思わなかったんだよ。
「しゃあああああ、かかってこいやあああああ！！！！！」
恐れを知らないってのは凄いよな。
老人の言われた通りに領主館に来てみれば、鎧に身を包み、剣を持った二人の騎士が出入り口を護っていた。
一気に俺の熱は冷めたね。とはいえ、どうしても貴族をぶん殴りたい俺は、どうにかして中に入り込めないかと考えていた。
その矢先だよ。
トビが喧嘩上等だよ。
気づいたら、トビが出入り口の騎士を行き成りぶん殴ってやがった。で、ぶん殴られたほうはピーピー笛を鳴らして侵入者を知らせ、もう一人はトビに持ち上げられている。
鎧を着た人をもち上げるとか規格外すぎる。
「キキー、何をやってんだ。早く行こうぜっ」
トビは持ち上げた騎士をもう一人の騎士にぶつけ、そんなことを叫ぶ。
「相変わらずめちゃくちゃなヤツだな。結局、正面突破になってしまったな……まあ、いつものことか」
トビが問題を起こすのはいつものことだ。行き当たりばったりってのは慣れている。
それに、なんだかんだ言って、俺とトビでどうにかできなかった問題は無い。
「ああ、いま行く」
なんてことはない。いつものことだ。
そう思い、無駄に広い領主館の敷地へと足を踏み入れた。

1－（8）

◆

「先程の笛の音は……」

領主館で鳴らされた笛の音は街中に響き渡っていた。侵入者を知らせる甲高いそれは、建物の中に居るミーニャたちにも聞こえていた。

「あの、若い連中じゃな」

「アインデル翁は、何が起こったのかご存じなのですか？」

オルタの問いかけに、アインデルと呼ばれた老人は小さくうなずいた。

「知っておるよ。ただ、それは儂ではなくミーニャちゃんに訊くが良かろう」

「ミーニャ君にですか？」

オルタはミーニャに顔を向ける。彼の瞳に、肩を小刻みに震わす獣人族の少女が映った。

賽は投げられてしまった、もう、キキさんとトビさんは後戻りができなくなってしまったと、彼女は自分のせいだと震えていた。

二人を助けに行けたならどれほど楽になるだろうか。けれども、それは叶わない。彼女は獣人族で、キキとトビは人間族だ。種族の壁が邪魔をする。彼ら二人を助けたばかりに、同族の仲間たちに迷惑をかけてしまっては本末転倒も良いところだ。

「……ミーニャ君。良ければ、何が起こっているのか訊かせてもらってもいいかい？」

オルタはなるべく優しい口調を心がけ、今にも消えてしまいそうなミーニャに語りかけた。

「……リーリエちゃんが領主様に酷い仕打ちを受けたって訊いて、ミーニャの恩人とお友達が怒って……」

「まさか、それで殴り込みをかけたのかい？」
なんという無鉄砲な輩がいたものだと、オルタは驚きに目を見張った。無鉄砲さもそうだが、なにより、貴族に向かっていく民がいるとは思わなかったのだ。貴族に対する民の恐れは、元貴族だった彼がいちばん良く知っているのだから。
「無理矢理にでも二人を止めるべきでしたにゃ、ミーニャのせいで二人は……」
――――死んでしまう。
「ミーニャのせいじゃない、リーリエが弱っちいせい。勇気を出して街のみんなに合いに来ていたら、キキとトビは街にこなくて済んだ。だから、」
「そなたらは勘違いをしておる」
唐突に、アインデルが口を挟んだ。
「儂が思うに、あの、若者たちは誰にも止められなんだと思うぞ」
「でも、ミーニャが街に連れてこなければっ」
「ミーニャちゃんが連れてこずとも、あの若者たちならば自力できたであろうよ。なにせ、『ムカつくから、ぶん殴ってくる』と、単純極まりない理由で動く輩じゃからな」
そこまで言うと、アインデルは愉快気に笑った。
「どこぞの元貴族と同じくらい清々しいやつらよの」
「いやはや、まいったね」
オルタは苦笑し、続ける。
「ところでだ、一つ、面白い案があるのだが、聞いてみないかい？」

◆

「館の中には入れるな、追えっ！」
まずいまずいまずいっ、ひっじょうにまずい。

超人のトビとは違い、普通の人間たる俺は騎士たちとは戦わずにデッドオアアライブの鬼ごっこをしていた。もちろん、鬼役は俺だ。

目的はクソ貴族のクソ領主をぶん殴ることだから、取りあえず館のほうに向かっているのだが……出入り口から館までは無駄に距離があるため、たどり着く前に俺の体力が尽きそうだ。というか尽きる。

「ああもう、どうすんの俺っ！」

こんなわけのわからない世界で死にたかないし、死ぬつもりもない。かといって、鎧を纏い、剣を持ったやつらに挑みかかったところで勝てるわけもない。体力が底を付きつつあるため、逃げ切ることもできない。

「ていうか、もうさ。詰んでる、だろうがあああああああ

「見せんでいい」
何が嬉しいのか、斬られた背中を喜々とした表情で見せようとするトビを制し、俺は騎士たちに向きなおる。
どうやら騎士たちはトビを警戒しているようで、半包囲の形をとりながら、じわりじわりとにじり寄ってきていた。
「キキ、後ろからも来たぞ。援軍だ、きっと」
おそらく、街に出ていた騎士たちが帰ってきたのだろう。これで囲まれたわけだ、俺とトビは。
「どうする、キキ？」
俺が訊きたいっての。本当ならばトビを焚き付けて力技で突破したいところだが、どうもそうはいかないようだ。
「オレが全部ぶっ飛ばしてやろうか？」
「やせ我慢をするな」
強がってはいるが、トビは背中の痛みでまともに戦える状態じゃないはずだ。今は背中を向け合っているから見えないが、さっき顔を合わせたときの顔は青白かった。斬られた背中の出血がひどいらしい。
「気にすんなよキキ。お前に拾われた命だからな、お前が行けっていやあ、オレは喜んで死んでやるよ」
「ふざけたことをぬかすな。クソ貴族のクソ領主をぶん殴って、二人そろってここを出るんだ。大丈夫だ、俺がどうにかする」
柄にもなくトビが真面目だから、何かスイッチが入っちまったよ。腰を据えて覚悟を決め、この窮地を脱する方法を考える。
騎士たちが半包囲から完全な包囲態勢へとなりつつあった。
時間が無い。
何ができる、今の俺たちにできることはなんだ。
考えろ。
戦う以外にできることはなんだ。降伏はどうだ、上手くいけば牢屋送りで済むかもしれない。いや、それではダメだ。手負いのトビが牢屋でくたばるのが目に見えている。

そうだ――――っ、
「者共、かかれっっ！！！！」
来るっ、やるしかないっっ、、

1－（9）

「貴様ら、誰に剣を向けているのか分かっておるのかっ、いい加減にせよっっっっ！！！！！！！」

俺は腹の底から声を絞り出し、気迫を込めて喝破した。自分でも驚くほどの声量だ。おかげで騎士たちの足が止まった。

「……誰だと？　ただの侵入者が偉そうに何を言っている。かまわ」

「私は、キキ・キエイ。貴族であるぞっ」

隊長らしき人物の号令を遮り、俺は高らかに名乗りをあげた。これだけ暴れまわったあとだ、信じはしないだろう。だが、よほどの馬鹿でない限り、簡単に仕掛けてはこないはずだ。

ここまで堂々と宣言されたら、もしかしてと、疑念を抱くのが人間の心理ってものだ。

「……嘘を言うな。そのような、みすぼらしい服装のものが貴族であるわけがない」

言い切りはしたが、かかれとは号令を下さない。間違いなく、相手は疑念を抱いている。是が非にでも俺が貴族だと信じさせてやる。そのうえで堂々とクソ貴族に合ってぶん殴ってやる。

「なんだと？　貴族たる私の言葉を信じられぬと申したか」

仰々しい物言いで威圧感たっぷりに言うと、俺は隊長らしき者に向かって一歩を踏み出した。

「ち、近づくなっ。我々オルベール騎士部隊が田舎ものだからって、舐めるなよ。貴族か、そうでないかぐらいの判別はつく」

口調の割には焦っている。内心、違ったらどうしようかと冷や冷やしているんだろう。

「よいか、しばし待っておれ」

そう言って俺はポケットから皮の財布を取り出し、小銭入れを開く。そこから、なるべく綺麗な五百円玉をみ繕った。もちろん、新硬貨のほうだ。

「見よ」
一言だけ口にし、俺は金色に輝く五百円玉を高々と掲げる。
「！！　き、金だっ」
誰かの一言を皮切りに、騎士たちが騒ぎ出す。「は、初めて見た」「王都で公開されていた金よりも大きいぞ」「なんて綺麗なんだ……」
まあ、実際は金ではなく、銅が主成分のニッケル黄銅製の硬貨なんだが、予想通りの反応を示してくれて安心したよ。
「これでも貴様らは私が貴族かどうか疑うかっ」
「！！　も、申し訳ありませんでした。金を持ち歩かれているようなお方が、貴族でないはずがありません！」
一斉にしゃがみこみ、頭を垂れて忠誠のポーズをとる騎士たち。
「うむ。分かればよろしい」
上手くいって良かった。ワンコインで命を護ったよ、これから俺は五百円玉に頭が上がらないだろうな……
「騙されるでないっ！！」
どこぞから大声が轟いた。その場の全員が半ば反射で声の方に顔を向ける。
「そやつは貴族などではない！」
視線の先。醜悪きわまりないデブが、二人の兵士を連れて館からこちらへと向かってきていた。
音楽家モーツァルトのような髪型、子供くさい赤のマント、指には宝石と思われる指輪をはめ、たゆんたゆんと揺れるお腹。絵に描いたような貴族像だ。ああ、間違いないね。
クソ貴族のクソ領主様だ。
自分から殴られにくるとは殊勝な心がけじゃあないか。今すぐ殴り逃げしたいところだが、今のトビに無理はさせたくないので、ここは落ち着いていく。
「私を知らないとは困ったものだ」
「笑わすでない。キエイ、などという苗字は聞いたこともない。さ

きほど出していた金とて、盗んだ物ではないのか？」
俺の前までやってくると汚い声を発するクソ貴族。
「失礼極まりない男だな。本当に私を知らないとは、どうやら呆けていらっしゃるようだ」
「口の減らないやつだ。ならば訊くが、お前の役職はなんだ、階級はなんだ、このような田舎町になんのようだ？」
おっと、これはマズイ。さすがにどれも答えられない、本物の貴族を相手に適当なことは通じないだろうしな。
「どうした、ほら、答えてみよ。ん？」
うっわ、ほんと殺したいはこいつ。
「キキ」
と、今まで大人しくしていたトビが口を開いた。かなりまいっているらしく、声に力がない。
「お前は黙ってろ。体力を使うな」
「ミーニャとリーリエが来た」
「なに？」
言われて俺は振り返る。
おいおい、どういうことだこれは。一戦やらかす気か？
俺の目が捉えたのは、斧や鍬、木の盾などで武装した一団だった。中には女子供が混じっており、ミーニャとリーリエの姿もみうけられる。
「これは何事だっ、貴様ら平民風情がここに足を踏み入れて良いと思っておるのかっ！」
「変わらない醜さだね、ゲローブ」
武装集団のリーダーと思わしき男が口にする。透き通った落ち着いた声だ。
年齢は三十手前くらいだろう。さらさらの金髪で、男には片腕が、ない。
「貴様……オルタか！！　反逆者め、ワシと戦うつもりかっ」
「別に戦ってもいいのだけれど、今日は話をしにきたんだ」

「貴様ら汚物と話す舌など、もた」
「勘違いをしないでくれ、話があるのは君じゃない。マーロン・ハルス公爵の代理で来られた、キキ・キエイ男爵にだ」
「なに……？」
クソ貴族が俺を見る。その眼差しには若干の驚きと猜疑が含まれていた。
というかだ、確か男爵は貴族に含まれなかったと思うが……まあ、世界が違うんだ、色々と差異があって当然か。
何がなんだかわからんが、これは俺を貴族だと信じさせるチャンスだ。男に話を合わせることにする。
「久しいな、オルタ？」
そんな名前で呼ばれてたよな、確か。
「覚えてくれてたとは嬉しいよ、キキ。おっと、これはすまない。今の私は平民だから様を付けたほうが良かったかな？」
清々しいくらいにわざとらしい口調だな。この言い方からすると、オルタという男は元は貴族だったらしい。
「よしてくれ、私が敬称を嫌っているのを知っているだろ」
「はは、分かっている、冗談さ。君と私の仲だからね」
元同僚の仲良しって設定なわけね。それにしてもわざとらしい。
もう少し自然な演技ができないのかこいつは。
「まさか、本当に貴族だったとはな。それも、マーロンの使いとは……」
小声でクソ貴族がつぶやいた。どうやら完全に信じたらしい。
さて、貴族という立場を利用し、後はどうやってぶん殴る理由をつくるかだな。できればクソ貴族を領主の任から外し、権力と財力を奪ってしまいたいところだ。そうすれば、もう、リーリエにちょっかいをだすこともなくなるだろう。
「ところでキキ。マーロン公のお耳に入れたい話があるんだ」
「なんだ？」
「……実はね。外交問題に発展してはいけないと思って、街の者に

口止めをしていたことがあるんだ」
「！！　オルタ、貴様っ！　お前ら何をしておるか、平民どもを敷地から叩きだせっ」
激高し、騎士たちに怒声を飛ばすクソ貴族。騎士たちが慌てた様子で動き出し、オルタ率いる集団も咄嗟に武器を構えた。
ここまで話し合ってきたってのに、いまさら血を流すのはナンセンスだろうがっ、させるかっ。
「双方、剣を収めよっ！！！！」
俺は本日二度目となる喝破をする。両方の動きが止まることを願う。

1－（10）

「落ち着くんだっ！」
続いてオルタが喝破し、オルタ側は動きを止めた。
「止まるでない、行けっ、平民どもを切り捨てよっ！！！！！」
一度は怯んで動きを止めたものの、騎士たちはクソ貴族の叱咤で再度、剣に力を込める。
無理か、止まらないかっ。
「キキの言葉に反するはマーロン公に反するも同義ぞ！！！！！」
今度は騎士に向けられたオルタの喝破、ピタリと、騎士たちが動きを止めた。
なるほど、クソ貴族よりもマーロンって人のほうが位が上なわけか。
「オルタの言う通りである、私の言葉はマーロン公の言葉と思えっ。お前もだ、良いなっ」
オルタにすかさず追従し、さらには騎士たちだけでなく、クソ貴族にも言い含めておく。
「う、ぬ……」
ひしゃげた声で呻く、クソ貴族。
少し冷やっとしたが、これはいい具合に展開が転んだものだ。いま、この瞬間、俺の立場はこの場にいる誰よりも上になったのだ。
とはいえ、強制力には欠けるが。
「……オルタ。街の者に口止めをした話とは、どのような話なのだ？」
場が静かになったのを見計らい、さきほど中断された話の続きを促す。
「その話をする前に、まずは見て欲しい子がいるんだ。リーリエ、さあ、こちらへ」
「リ、リーリエか！！！？」

突然の指名にリーリエはぴくりと反応し、怯えた様子でミーニャの後ろに隠れてしまった。
「オルタ、なんだか、怖いぞ……」
空気の読めないやつだな、いや、今の状況を理解できていないのか。
「キキ、彼女は見ての通り、、、妖精族だ」
うん、知ってる。知ってはいるが、リーリエが自分のことを珍しいと言っていたので、知らない風を装ってオサレに驚いておくことにする。
「なん……だと……？」
「そこにいるゲローブはね、他種族である妖精族の彼女を物のようにあつかい、さらには手をあげた。キキなら、これがどういう意味か分かるね？」
ようは、ゲローブのしたことが妖精族に知られたら種族間で戦争が起こると言っているわけだ。
「なるほど。妖精族と人間族の戦争を回避するため、オルタは街の者に口止めをしたわけか」
「そういうことだよ」
「と、言っておるが、実際はどうなのだ。クソ……ではない、ゲローブ」
「そのようなこと、嘘に決まっておろう。証拠はあるのか、、オルタ！！」
頭の悪い悪人ってのはすぐに証拠を出せだの見せてみろという。まったく、なってないな、ここは俺が賢い悪人ってのをみせてやろうか。
「ゲローブよ。証拠などはどうでも良いではないか」
「それは、どういう意味だ」
「証拠というものは作るもの、と言っているのだよ」
「金と権力にものを言わせ、捏造するつもりか、貴様」
みるみるうちにゲローブの顔が赤くなっていく。すんごい怒って

らっしゃるよ。赤いカエルみたいだ。
「落ち着きたまえ。いいか、その逆も可能だということを忘れてはいかんよ？」
俺に金を積めば、証拠があったとしても無かったことにしてやる。そう言っているわけだ。
「は……そうか、そういうことか」
俺の意図を理解したゲローブに笑みがこぼれだす。一言でいおう、気持ち悪いと。
「いくらだ、いくらだせばいい？」
「今回は金以外のものにしようか。そうだな、領主館ではどうだ？」
「領主館だと？　つまり、オルベール領主の座をよこせということか？」
「理解が早くて助かるね」
「いいだろう。このような辺境の地などくれてやるわ。もとより王都に戻りたかったのだ、ワシは」
言うなり、ゲローブは懐から丸められた紙を取り出した。
「オルベール領主の認可状だ、受け取れ」
「ああ、すまないな。しかし、、手続きなどは必要ないのか？」
本来、こういった引き継ぎには面倒な手続きが必要で、正式な許可がないとダメだと思うんだが。
「そこの妖精がオルベールから逃げてからというもの、ここは寂れてしまい、既に王都から見離されてられておる。統治しているものが変わったとて気にせんよ、王都は」
金にならないからどうでもいい、ということか。
俺たちの世界で例えるならば、この街は経済が破綻したので国が見捨てた、ということだ。
「ふむ。つまり、認可状を持つものが統治していれば文句を言われないわけだ」
「そうだ。王都に干渉はされぬ、そのかわり、援助もしてもらえぬがな。では、約束通り妖精の件は黙っていてもらうぞ」

「ああ、分かった。それよりゲローブ」
「なんだ、まだ、何かよこせと言うのではあるまいな？」
言わないっての。
だって、お前にはもう、何もないんだから。
「早く敷地内から出て行け」
「分かっておる。荷物をまとめたらすぐに出ていくつもりだ」
「どこに行くんだ、出口は向こうだぞ？」
館に向かおうとするゲローブをに向かって俺は言い放ってやった。
ゲローブは、どういうことだと言いたげに俺を不思議そうに見つめている。
「……そうか、そういうことだったのか。キキはとんでもない詐欺師だな。お金に目が眩んでしまったのかと、少しばかりあせってしまったよ」
静かに事の成り行きを見守っていたオルタだが、俺の目的に気がついたらしく、声をあげて笑い出した。彼以外はいまだに気が付いておらず、一様にぽかんとしている。
「おめでたい頭だな、クソ貴族。お前にはまとめる荷物なんて有りはしないんだよ」
口調を変えておく必要もなくなり、俺は元の口調へと戻して言う。
「急に話し方を変え、貴様は何を言っておる。館にはワシのコレクションや財産、荷物が置いておる」
「あほうなことをぬかすな。領主館内の敷地にあるものは全て俺のものだろうが」
「あほうなことを言っているのは……まさか……ワシを、、はめたのか？」
いまさら気づいたのか、あほうが。賢い悪人ってのはな、合法な手段で相手に反撃を許さないくらいに痛めつけ、すべてを奪い取るんだよ。
認可状を持つ領主たる俺が、領主の持ち物たる館に入るなと言えば、たとえゲローブですら入ることは許されない。

「貴様っ、いくら街の領主だとはいえ、好き勝手できるわけではないぞ！　王都にて貴様を査問会議にかけてくれるわっ」
　わかってないな。認可状を持っている、領主だということは、こんなこともできるわけだ。
「騎士隊に命令する。そいつを捕えて牢屋に放り込め」
「し、しかし、、相手は貴族のゲローブ様です、そのようなことは……」
　難色をしめす騎士たち。けれども、渋るのは予想通りだ。
「何を言っている、ゲローブなどという貴族は聞いたことがない。そいつはただの侵入者だぞ」
「き、貴様……！！！！！」
「お前らは領主たる俺の言うことが聞けないのか？　命令違反で首を跳ね飛ばされたいのか？」
「い、いえっ」
「なら、早く侵入者を拘束して牢屋に放り込め」
「はっ」
　命令に従って騎士たちが一斉に動き出す。そして、ゲローブの両腕を掴むとずるずると引きずって行く。
「は、離せ、離さぬかっ」
　わめき散らすゲローブを見つつ、俺は、一つ忘れていたことを思い出した。
「待て、止まれ」
　騎士たちを呼び止めると俺はゲローブに近づく。
「歯を食い縛れ」
　まあ、食い縛る時間なんてやらないが。
　全身全霊の力を込め、俺は、醜悪な性格をあらわしたゲローブの顔面へと、拳を叩き込む。
　そして言ってやる、なに、たいしたことじゃない。
　所詮は子供の戯言。ただの感情の押しつけ。
「ムカつくんだよ、お前」

立派なことなんざ、俺には言えないんだよ。
俺はまだまだ子供で、高校生なんだから。

1－（11）

「連れてけ」
「は、」
俺の命令を素直に聞き、騎士たちはぴくぴくと痙攣（けいれん）しているゲローブを牢屋へと連れて行く。いや、牢屋とかどこにあるのか知らないけど。
「キキ君」
殴って痛む手をさすっていると、オルタが俺に声をかけてきた。ミーニャも一緒だ。しかし、まずは話よりもトビが先だ。
「悪いんだが、話は後にしてくれ。怪我人がいるんだ」
「トビさんなら、すでに街の人たちが医術所に運んで行きましたにゃ」
「そうか、対応が早くて助かる。リーリエは？」
「リーリエちゃんはトビさんに着いていきましたにゃ」
大丈夫か大丈夫か、と涙目で付き添うリーリエの姿が浮かぶ。あいつのことだ、まあ、死ぬことはあるまいて。
「キキ君、改めて自己紹介をしたいんだけど、いいかい？」
「ああ、頼む」
「私はオルタ、この街、オルベールの元領主にして元貴族だった者だ」
「喜衛嬉々、呼び方はさっきみたいにキキで頼む」
言って俺は手を差し出した。はたして、この世界には握手という概念（がいねん）はあるのかね。
「わかった、キキ」
オルタは片方しかない手で、がっちりと握手を交わした。握手ってのは、世界共通なのだろうか。
「君とトビ君のことは領主館に来るまでの道中で少しだけ聞かせてもらったよ。なんでも、異世界から来たらしいね」

「ん、まあな。って信じるのか？」
自分で言うのもなんだが、うさんくさいことこのうえない。と思うんだがな。
「信じるさ。危険をかえりみず、友人のために無茶をするような君だからね」
きらりとオルタの歯が光る。なんというさわやかスマイルだ、さぞ、モテることだろう。
「しかしだ、随分と綱渡りだったね。あまり関心ができるやり方じゃあないね」
「そうですにゃっ、凄い心配したんですにゃ！」
「悪い悪い。で、お前らはどのあたりから見てたんだ？」
ミーニャには適当に謝っておき、俺は気になっていたことを訊いた。
俺がゲローブに役職や階位を聞かれ、答えられずピンチにおちいったところでオルタたちがやってきた、しかも、窮地を脱する見事な合の手をたずさえてだ。これを、偶然という一言でかたずけてしまうのはいささか無理があるというものだ。
間違いなくどこかで状況を見ていた、と考えるのが妥当だろう。
「君が、貴族だと名乗ったあたりからだよ。それまでは仲間を集めていてね」
「なるほど。領主館で俺とトビが騒ぎを起こしたことにより、街に出ていた騎士の一派が引き上げて監視が緩まったところを見計らい、一か所に合流したわけか」
じゃないと、これだけの武装集団が集まることはできないはずだからな。
「正解だ。本当はすぐにでも敷地内に乗り込んで行くつもりだったけれど、なにやら君が面白いことを言っていたのでね。機会を窺ってから乗り込んでいったんだ。その結果、誰も死なずに済んだので最良の機会で乗り込めたと思っているよ」
「結果だけ見ればな」

「その結果が重要なんじゃないか。それにしても、君の状況把握と機転の良さには舌を巻いたよ」

オルタの言葉を訊いた街の人々が、「貴族を相手に度胸があるよ」「金と街を奪うだなんてたいしたもんだ」「スカッとしたよ！」などと口々に言い出した。貴族、というよりは、ゲローブの嫌われぶりがよく分かる。

褒められて悪い気はしないが、こう、背中がかゆくなる。

「これからキキはどうするんだい？　オルベールの領主として、私たちを導いてくれるのかい？」

ピタリと、街の者達が黙って静かになった。彼らの期待に満ちた眼差しが俺に注がれる。

まあ、答えは決まっているよな。

「やるわけないだろうが、あほう。これはお前にやるよ」

言って認可状をオルタに手渡した。

「……そうか。残念だ」

「言うまでもないが、目立った政策をとらなければ王都に目をつけられることもないだろうから、元貴族のあんたが統治をしていても問題はないはずだ。ゲローブの処遇だが、それもあんたに任せる」

「そうだね。でも、私で良いのだろうか？」

「それを訊くのは俺じゃないだろ」

あごをしゃくり、オルタの後ろを差す。

オルタは振り返って街の住人を見回したあと、ゆっくりと口を開いた。

「私が不甲斐ないせいでゲローブなどという下賤な輩に街を奪われ、重い税を課せられ、皆を苦しめてしまった。もう一度、皆がチャンスをくれるなら、私は、オルベールの領主となって、ともに歩んでいきたい。どう、だろうか？」

しばしの静寂のあと、歓喜の声が響き渡った。

空気が震える。喜びだけが満ち溢れている。

ずっとこの時を待っていたのだろう、オルベールの住人達は。

貴族に街を見捨てられ、虐げられ、ゲローブの課した重税に苦しみ、それでも彼らは希望を失わずに生きてこれた。それは、オルタが居たからだ。いつかゲローブを追い出し、また、オルタが街を治めるこの日を、ずっと待ち望んでいたのだろう。

鳴り止まぬ歓喜の声を聞きつつ、俺は一人そう思っていた。と、

「キキさん」

ミーニャが声をかけてきた。

「どうした。お前も街のやつらに混じって叫んできたらどうだ？」

「キキさんは混じらないのですかにゃ？」

「俺は関係ないだろ。この街の住人でもなければ、この世界の人間ですらないんだ」

「でも、こうして皆さんが喜べるのはキキさんのおかげですにゃ」

「否定はしない。けれども、俺が貴族に喧嘩を吹っかけたのは街の住人のためじゃない、オルタが領主になったからといって、別に嬉しくもなんともない」

「リーリエちゃんが悲しんでいたから、ですにゃ」

分かっていますよ、と言いたげに隣りでにっこりとミーニャは笑う。

なんか腹が立つな、ちくしょうが。

「結局は、俺がムカついたから。ってのが正解なんだがな」

それが本音だ。

リーリエとは友達になって間がないとはいえ、なっちまった以上、苦しんでいるのなら手を差し伸べ、泣いているならその訳を訊くのが当然だ。友達が珍しいという理由だけで物扱いされたなら、腹の一つや二つも立つってものだろう。

もしかしたら……俺はトビ以上に単純なのかもしれないな。

「もしも、」

少しばかり自分の短絡的思考に呆れていると、なにやらミーニャが聞きたそうにしていた。

「もしも、なんだ？」

うつむき、恥ずかしそうにしているミーニャ。なんだ、また優しくしてくださいとか気持ちの悪いことをぬかすんじゃなかろうな、こいつは。

「もしも、もしも……ミーニャがピンチになったら、白馬に乗って助けにきてくれますかにゃ？」

行くかボケぇ、どんだけメルヘンなんだよこいつ。助けに行くんなら戦車に乗っていくわっ、なんなら白く塗ってから行ってやるよっ。

「白馬は無理だ。でも、ま、トビと一緒に助けに行く可能性はゼロではない」

「そこは１００％助けに来てくださいよぅ」

何が「よぅ」だ。気持ち悪い、ぶりっ子が。殺意の波動が目覚めるだろうが、あほう。

いじけてしまったミーニャを他所に、いつの間にか、「祭りをするぞ」と騒ぎ出している街の住人に目を向ける。

俺とトビがこれからどうするか、どうやったら元の世界に帰れるのか、考えることは多々ある。あるが、取りあえず、それは祭りが終わった後に考えることにする。

楽しめるときに楽しむ。

これ、学生の常識な。

2－（1）　あほう＋にゃ＋妖精＝キキのストレス

異世界にきて記念すべき一回目の朝は、オルベール領主館の客室で迎えた。

そして、俺はベッドできのうのことを思い出して頭を抱えたくなった。

きのう、オルタが領主に就任したという報せは電光石火の速さで街の住人すべてに伝わり、急きょ、街をあげた祭りが行われた。通りにはいくつものテーブルが並べられ、その上には数々の料理や酒といったものが置かれ、一時間も掛からぬうちに人々はバカ騒ぎを始めた。

最初は良かったんだ。この世界の楽器で奏でられる陽気な音楽を聞きながら、俺はミーニャと一緒に異世界の飯に舌鼓をうっていて、ゆったりと祭りを楽しんでいた。

街の人たちは積極的に話しかけてきてくれて、色々な話を聞かせてもらったし、俺の世界の話も色々とした。キキ様、なんて同い年の女の子に様づけで呼ばれて恥ずかしかったりもしたが、まあ、悪い気分ではなかった。良く分からんが、なぜかミーニャはムッとしていた。

ああ、楽しかったよ。あほうとリーリエが乱入してくるまではな。

俺が街の女の子と雑談に興じているとだ、どこからか、「誰かその人を捕まえてくれ！」なんて叫びが声が聞こえてきた。見てみると、上半身裸で包帯を巻いたあほうがリーリエを肩車しながら、こちらへと向かって来ていた。

「祭りだっていうのに寝てられるかっ、バカめ！」

バカはお前だ。怪我人は大人しくしとけっての。

「リーリエを仲間外れにするなんてズルいぞ！」

いや、お前は怪我人じゃないじゃないんだから普通に参加しろよ。

余計なもん連れてくるなよ。
「キキはどこだっ、キキを出せ！」
「トビ！　あそこにいるぞ、ミーニャも一緒だ！！」
隠れていれば良かった。後悔先に立たずってか。
「キキぃぃぃぃぃ！」
叫びながら突進だ、文字通り突進な。俺の隣りで話していた女の子が見事テーブルにダイブだよ。
「ナイスですにゃっ」
吹き飛んだ女の子を見て、グッドポーズを決めてミーニャがそんなことを言っていた。意外とひどいやつである。
「キキ、どうして祭りのことを言わなかったんだ」
「急きょ行われた祭りだし、なにより、お前は治療中だろうが」
「リーリエは治療中でははいぞ、リーリエには声をかけてほしかったぞ！」
俺は保護者じゃないっての。いちいち伝えに行くかよ。
「や、やっと追いついた」
トビを追いかけてきたのだろう。俺たちのところに中年のおっさんがやってきて、乱れた息を整えている。
「出たな、医者やろう」
「医者？　僕は医術師だよ。それより、早く院に戻って安静にしていてくれ。出血は止まったけど、君は血が足りないから動き回れる状態じゃないんだ」
「馬鹿めっ、オレに血など必要ないわ！」
「いや必要だよ！」
「うるせえ！」
正論いったのに殴られるとか、おっさん可哀そう過ぎる。さらに周りで飲み食いをしていた者に大爆笑されていた。俺は同情するよ、おっさん。
「オレ、祭りに参加してもいいよな、な？　キキ？」
「別にかまわんが、走ったり暴れたりはするなよ？」

「任せろ！」
返事だけは良いんだよな……
もちろん、トビが自重するわけもなく、騒ぎまくっていた。飲むわ食うわ歌うわ踊るわ、物は壊すわ人わ投げるわと、騒ぎまくるまくる。あげくの果てに、やはり血が足りなかったらしく、気絶して医術院とやらに運ばれていった。盛り上がりはしたが、トビの被害にあった者は多い。まあ、祭りでの出来事だ。誰も怒ってはいなかったが。

今日は、トビの様子見がてらに医術院とやらに行って、トビに殴られたおっさんには謝っておくことにする。
俺はそう思い、寝心地の悪いベッドから出た。
「キキ、朝ご飯だ！」
あてがわれた客室を出ると、とたとたと長い廊下を走ってきたリーリエに声をかけられた。まるで、俺が朝飯のような言い方だ。
「そうか、どこに行けば食える？」
「リーリエが案内する」
「頼む」
領主館で一夜を過ごしたとはいえ、まだ俺は館内のことを把握していない。きのう、オルタに客室をあてがわれたあと、俺は見て回る体力がなくてすぐに寝てしまったからだ。
「キキ、迷子になるかもしれないから手をつなごう」
「断る」
「！？」
手をつなぐ理由が分からん。リーリエが先導をしてくれたら事足りるし、わざわざ手をつなぐ必要がない。
「迷子になってもいいのか？」
「そもそも、迷子にならない」
「……手をつないだら、リーリエともっと仲良くなれるのになあ」
ときおり上目使いでチラチラと俺を見てくるリーリエ。そんなア

ピールいらないから。
「ああそう。それよりも早く案内してくれよ」
「……」
「……」
無言で見つめ合う俺たち。
「嫌だっ！！」
なにっ！？
言うなり走り去って行くリーリエ。これだから子供ってやつはっ。
俺はリーリエを追いかける。見失うと朝食にありつけなくなる。
何せ、館はけっこうな広さなのだ。
走ること数分、リーリエはどこぞの部屋に飛び込んでいった。俺もすかさず部屋の中へと入って行く。
「おや、キキ君。良い朝だね」
中ではオルタが書類を片手に、優雅（ゆうが）に食事をとっていた。
十メートルくらいだろうか、の長さのテーブルには純白のクロスが掛けられており、その上には朝食とおぼしき物が乗っている。西洋貴族の食堂、といったところだろう。
「あまり良いとは言えないな」
ふわふわの寝具（しんぐ）に慣れている俺は、こちらの世界の寝具は堅（かた）かった。さらには、起きて早々に追いかけっこをさせられたのだ、これで良い朝とは言えない。
オルタの対面に座る。
「ミーニャあ、キキが、キキがあ！」
「照（て）れていただけだからね、ほら、リーリエちゃんも朝ごはん食べようにゃ？」
リーリエはエプロン姿のミーニャに抱き着いており、ミーニャは困った表情で慰（なぐさ）めの言葉をかけていた。
「キキ。今日の予定は決まっているかい？」
ミーニャたちを見ているとオルタが話しかけてきた。目は書類に向けたままだ。

「とりあえず、医術院とやらにトビの様子を見に行くつもりだ。できれば、お前に案内して欲しいと思ってる」
俺は目の前に置かれている朝食に手を付ける。まずは飲み物をすすった。
「すまない。領主に戻って初めての日だからね、やることが多くて付き合うのは無理そうだ」
「そうか。なら仕方がない」
「良ければミーニャが案内しますにゃ」
「リーリエも案内するぞ！」
二人は席に着きつつ、案内役を買って出てくれた。正直いって遠慮したいが、背に腹は代えられない。
「わかった、頼む」
「はいですにゃ」
「うむ！」
笑顔でうなづく二人。はっきり言って不安だ。なにより、うるさくなりそうで嫌なんだよな。
「トビ君に合ったあとは、街で買い物をしてくるといいよ」
「お金は持たせてくれるのか？」
「無論だとも。買い物をしたあとは、アインデル翁に合ってくるといい」
「誰だ、それは」
「きのう、妖精の雫をゆずって下さったおじいさんですにゃ」
言われて思い出す。あの、髭の長い老人かと。
「アインデル翁はなかなかに博識なお方でね、もしかしたら、元の世界に帰る方法を知っているかもしれないよ」
さすがはオルタだ、俺の求めていることを良く分かっている。内心で感謝しつつ、俺はさっさと食事を済ませることにした。

2－（2）

◆

オルベールの街は賑(にぎ)やかとはいえない。けれども、街を行き交う人々には笑顔が見て取れるし、どこか、楽しそうである。これも、オルタが領主になったおかげなのだろう。

今日は天気にも恵(めぐ)まれ、オルベールの大通りには多くの市が立っていた。辺境の地とはいえ、街には人が多いらしい。

「キキさん、まずはどこにいきすにゃ？」

「買い物はあと、まずはトビの居る医術院に行くって話だったろ」

「そ、そうでしたにゃ」

てへ、なんて自分の頭をこずくミーニャ。ぶち殺したくなったのはいうまでもない。

医術院とやらは大通りの中央辺りに建っており、さして歩くこともなく着いた。今は医術院の前に居るわけだが……

『オレを自由にしろぉぉ、改造する気かぁぁぁぁ！！！！！！！！』

あほうのわめき声が聞こえる。意味が分からん。いったい、中では何が起こっているのやら。

「トビさん、ですよにゃ。この声」

「トビが苦しんでおるぞ！」

苦しんでいるっていうか、楽しんでいる気がする。

「あ、リーリエちゃん、待ってほしいにゃ！」

リーリエを追いかて中へと入るミーニャ。あまり気は進まないが、仕方なく二人を追うことにする。

中では、それはそれは面白い光景が広がっていた。

「ああもう、こんな元気な怪我人は初めてだよ！　そもそも、怪我人なのか！？」
「落ち着いてください先生っ！　彼は間違いなく怪我人です！！」
「トビぃぃ！」
「リーリエ！　助けてくれ、このままだとオレはカッコイイ改造人間にされてしまう！！」
　かっこよくなるんならしてもらえよ。
「かいぞうにんげん？」
「ミーニャに聞かれても困るにゃ……」
「何をしてんだ、お前は。そういうプレイか？」
「ミーニャ、キキ！　助け」
「少し黙ってろ」
「はい」
　言われた通りに黙すトビ。おそらく、じっとしないからだと思うが、トビは何本もの鎖で診療台に縛りつけられていた。
「ああ良かった、君たちが来てくれて助かったよ。包帯を変えようとしたら、『改造する気か』ってわけの分からないことを言い出して暴れるから困っていたんだ」
　ご愁傷様。トビがわけの分からないことを言うのはいつものことなので、俺はさして驚きはしないし疑問にも思わない。むしろ、トビを押さえつけたおっさんに驚くよ。
「トビ、大人しく包帯を変えてもらえ」
「良かろう」
　何を偉そうに。最初からそうしとけよ。
「キキ、かいぞうにんげんってなんだ？」
　くいくいと服の裾を引っ張り、どうでもいいことを訊いてくるリーリエ。というか、そのまんまだから説明に困る。
「ああえと、あれだ、カッコイイ人間のことだ」
　説明が面倒なので適当に。
「なんと！　カッコイイ人間のことか、ならばキキとトビはすでに

かいぞう人間だなっ」
「トビはそうだな。俺は違うが」
残念ながら、俺はトビのように整った顔はしておらず、ごくごく平凡なルックスだ。生まれてこの方、彼女はおろか告白すらされたことがない。
トビの場合はモテるのだが。いかんせん、トビの性格を知ると女の子は霧散するように離れていく。そのため、トビも年齢イコール彼女なしである。残念な男前だよ、本当に。
「キキさんはカッコイイですにゃ！」
急に大声をあげたミーニャ。少し、驚いてしまった。
「……なんだ、いきなり」
「あ、いえ、あはは……冗談ですにゃ」
顔を赤らめ、照れ笑いを浮かべながら、そんなことをいうミーニャ。
というかだ、冗談ってひどくないか？　カッコイイが冗談ということはだ、俺はカッコ良くないということになる。遠回りにけなされた気分だ、ちくしょうめ。
「よし、これで終わりだ」
「おお、ありがとな」
包帯を変えるのが終わったらしい。トビは上着を着ている途中で、おっさんは包帯を箱になおしている。俺はそんなおっさんに話かける。
「トビの具合はどうなんだ？」
「傷は問題ないよ、完全に塞がっているからね。ただ、医術では失った血液までは再生できないから、自然に回復するまで激しい運動を控えてほしい」
「前から疑問に思っていたんだが、医術ってのは魔法のことか？」
「妙なことを訊くだんね。ああいや、そういえば君とトビ君は異世界から来たんだったね。もしかして、君たちの世界には魔術や魔法は存在しないのかい？」

「言葉は存在するけど実際に使える人はいない」
「それは不便な世の中だね。『医術』というのは、魔術や魔法でおこなう治療のことをいい、また、医術を行使できる術者のことを『医術師』と呼ぶんだ」
医療の変わりに医術、医者の変わりに医術師、といったところか。
「世界が変われば色々と違ってくるものだな。ありがとな」
「礼には及ばないさ。それよりもトビ君のことだが、後は自宅療養で大丈夫だよ」
「わかった、このまま連れて帰る。治療代はいくらだ？」
「今回はタダでいいよ。僕は商人じゃないからね、街の英雄からお金を取るほど無粋じゃあない」
英雄うんぬんは横におくとして。無駄にかっこいい、このおっさん。医は仁術というが、まさしくこういうことだろう。
「それはありがたい。感謝する」
「なに、気にしないでくれたまえ」
「キキ、これからどっか行くのか？」
着替え終わったトビが、どこかへ行きたいと言わんばかりに口を開いた。縛られていた肌の部分が赤くなっている。
「ああ、買い物に行く。その後はきのう合った老人に会いにいく」
「おっけおっけ。買い物って何を買うんだ？　エロゲか？」
「そんな物は買わん、そもそも売ってるとは思えん。おもに服だ」
「マジかよ、エロゲ買わないのか。どうかしてるぜ」
どうかしてるのはお前の頭だ、桃色ブレインが。
「あ、武器は買わないのか？」
「武器か……」
「モンスター出るし、買っとこうぜ」
そういえばそうだった、この世界は日本のように平和で安全という訳ではなかったな。使いこなせるかは別として、護身用に持っていたほうがいいのかもしれない。
「そうだな、武器も買っておこう。そろそろ行くぞ、トビ」

「おう、オレはハンマーを買うぞ」
「ならなら、リーリエは弓がいいぞ」
「ミーニャは魔術補助の杖かにゃあ」
いや、買うのは俺とトビの分なんだが……とは、盛り上がっているために言いずらい。まあ、オルタが持たせてくれたお金は結構な額なので、ミーニャとリーリエの分も買ってやることにする。
「じゃあおっさん、俺たちはそろそろ行く。世話になった、またな」
「ああ、またね」
そうして、俺たちは医術院を後にした。

2－（3）

◆

俺たちは今、服屋に来ている。街でも人気の服屋らしく、店内にはぽつぽつと客が見て取れた。

平民向けの服屋なので、お値段はどれもリーズナブル、、らしい。らしい、というのは、俺はこの世界の文字や数字が読めないからだ。妖精の雫では言葉を理解できても、文字や数字までは読めないらしい。

この世界の服は想像と違って意外と充実していた。使われている素材こそは少ないが、それでも意匠をこらしたものが多く、また、種類も豊富だ。

「さすがに漢字が印刷されたものは無いか」

俺は服装にはこだわらない。現に今も、『夏』とだけプリントされたTシャツとデニムのズボンというシンプルな服装だ。服に金を使うなら、音楽CDや本に金を使う。

「キキさん、これ、似合いますかにゃ？」

物珍しさから服を見て回っていたら、赤を基調にした服を身体に当てたミーニャに声をかけられた。耳がぴこぴこと動いており、どうにも、楽しそうだ。

「ああうん。似合うぞ」

似合うかどうかなんて分からないので、適当に返事をしておく。

「そうですかにゃ！」

とろけんばかりの顔である。というかだ、この世界の住人ではない俺とトビの服を買いにきたのであって、ミーニャの服を買いにきたわけではないんだが。

「キキ！　これ、可愛いぞっ」

今度はリーリエがやってきた。
「そうだな、可愛い可愛い」
「そうかっ、キキもそう思うか！」
「キキ」
またかよ。言うまでもなく、トビである。
「見てくれ、このマネキン」
「マネキンかよ！！」
しまった、あまりの流れブレイクから口に出して突っ込んでしまった。
「マネキンなんか持ってくるな、戻して来い」
「なんでだよ、オレ、これ買うぞ」
何に使う気だあほう。そもそも売り物じゃないだろうが。
「トビさん、マネキンを買ってどうするのですかにゃ？」
訊くなよ。どうせくだらないにきまっているんだから。
「使う。こう、この辺に穴を開け――――」
「言わせねえよっ、お前は頭がおかしい、いいから今すぐ戻して来い！」
「ええー……お前にも使わせてやるからよ、買ってくれよ」
誰が使うかあほう。
「聞こえなかったようだな、戻して来い」
「分かったわかった、諦めりゃいいんだろ」
渋々（しぶしぶ）と戻しにいったトビ。服屋に来て何を考えているんだ、あいつは。変態っていうか、もう、どうしようもないやつだ。
「トビさん……すごくえっちですにゃ……」
爆発するんじゃないかと思うほど、真っ赤な顔でうつむくミーニャ。どうやらそっち方面には耐性がないらしい。
リーリエはというと、不思議そうに小首を傾げていた。お子ちゃまにはわかるまいて。
「なあ、キキ」

「さてと、本腰入れて服を選ぶかな。リーリエ、悪いが訊きたいことがあるのならミーニャに訊いてくれ」
「う、うむ」
「あ、ずるいですにゃあ」
「何がズルいのだ？」
四苦八苦しているミーニャを置き去りにしてその場を立ち去る。
子供に性的質問をされても上手く答える自信がないので、後はミーニャにお任せだ。押し付けたともいうが。
言った手前、二三着は服を見繕っておくことにする。数字は読めないので、このさい値段は無視して機能性だけを重視する。
「とはいってもな、どういった素材が動きやすいだとかわからんなあ」
服に詳しくない俺が、どういった素材のものが動きやすいかなど知っている訳もない。それも、異世界となればなおさらだ。
「キキ様……？」
「ん？　あんたは、確かきのうの」
「ルイサでございます」
そうだそうだ。きのうの祭りで仲良くなった女の子で、話していたところをトビに追突されて机にダイブした子だ。
「奇遇だな、あんたも服を買いに来たのか？」
「はい。オルタ様が領主に戻られたので、その記念にと思いまして」
そう言ってにっこりと笑った。
こう、なんだ、彼女は好みのタイプだったりする。腰くらいまである茶色がかった綺麗な髪、澄んだ蒼い瞳、美少女ではないものの、癖のない整った顔。何より、物腰が柔らかくて知性的なのがとても良い。総じて、可愛いと思う。
「そのように見つめられては、照れてしまいます……」
「あっと、悪い。ああそうだ、いま、動きやすそうな服を選んでいるんだが、良かったら手伝ってくれないか？」
照れ隠しも含め、そんなことを頼んでみる。

「私でよろしいのですか？　男の人の服など選んだことがないのですが……」
　控えめで実によろしい。どこぞのあほうや天然ぶりっ子の猫耳娘、お子ちゃま妖精とは違うな。
「そんな難しく考えなくてもいいんだ。嫌なら別に断ってくれてもいい」
「あ、嫌なんかじゃありません。その、頑張りますので、お手伝いさせてほしいです」
　気遣いもできるなんて、本当にいい子だ。たまらん。
「悪いな、じゃあ頼むよ」
「はい」
　色々なことを話しながらルイサと服を見て回る。女の子と一緒に服を見て回ることは初めての経験であり、とても新鮮で楽しく感じる。トビのように常軌を逸した行動もしないので、とにかく穏やかな気持ちでいられるのが嬉しい限りだ。
「このコートなどはどうでしょうか、丈夫で柔らかく、なおかつ汚れにくい材質でできていますよ」
　ルイサの選んだコートを手に取って見てみる。
　フードの付いた黒のコートだ。オール黒というわけではなく、襟元と袖元には赤色のジグザグ模様が入っている。背には同じく赤で、ツノ？　みたいな絵が横向きで二本描かれていた。長さは膝くらいまでだ。
　コートというのは悪くない判断だと思う。いちいち洗う必要はないし、なんにでも合わせることができる。なにより、黒は俺の好きな色だ、うん、悪くない。
「着てみてはどうですか？」
「そうだな」
　その場にてさっと羽織る。肌触り、サイズと申し分ない。
「いい感じだ。うん。悪くない。ルイサはどう思う？」
「はい、とてもお似合いだと思います！」

「そ、そうか。なら、これをか――」
「似合いません似合いませんっ、にゃあああああ！！！！」
「ミ、ミーニャちゃん！？」
「いきなりなんだ、お前はっ」
何を考えているのか、唐突（とうとつ）にミーニャが現（あらわ）れて威嚇（いかく）をしてきた。
クソ猫が、ふざけやがって、少しびっくりしただろうが。

2－（4）

「ミーニャがリーリエちゃんに一生懸命説明しているあいだ、キキさんはルイサさんとキャッキャニャニャにゃですか。い～ご身分ですにゃあ」

キャッキャニャニャにゃってなんだよ、ウフフの間違いだろうが。

「キキさんってば、女たらしですにゃあ～～」

なんなのこいつ、トビレベルでウザいんだが。もう死んで欲しい。

「お前、何を怒ってるんだよ。もしかして嫉妬（しっと）か？」

「ち、違いますにゃっ！」

「デレツン萌えー」

っと、いつの間にか側にいたトビが、気持ち悪いことを言い出す。

リーリエも一緒だ。

「キキ。男はみんな、人形のお腹の下に穴を開けて、気持ちいいことをするらしいな！」

「トトトビさん！！　なんてことを教えてるんですにゃっ」

なんだよ、ミーニャのやつ。けっきょく答えられなくてトビに振ったんじゃないか。

「オレは本当のことを言ったまでだ、文句あんのか？」

「文句しかありませんにゃ！」

こう言ってはなんだが、トビに振ったミーニャが悪い。そしてトビとミーニャによるくだらない口喧嘩（くちげんか）が始まった。

俺はあえて言おう。

「どうしてこうなった、と」

俺ら、服を買いにきただけなんだぜ？

「キキさんもトビさんも最低な人ですにゃ。もうえっちえっちですにゃ」

誰か、後ろで意味の分からんことを言っているクソ猫を引き取っ

てもらえないだろうか。
あの後、トビとミーニャの口喧嘩の仲裁には入らず、俺はリーリエとルイサと適当に服を選んで買い、さきほど、ルイサとは服屋の前で別れた。
で、今は武器屋に向かっている途中なんだが……
「人間族の男性はみんな変態ですにゃ。獣人族は紳士で戦士なのに、えらいちがいですにゃ」
などと、服屋を出てからずっとミーニャはぶつくさと言っており、トビはというと、買った服を物色しながら歩いていた。
リーリエは誰かと出歩くということが楽しいらしく、終始笑顔で音程もクソもない鼻歌を唄っている。かく言う俺は、このメンツで武器屋などという危険地帯に出向いてよいものかと頭を悩ませていた。
そんなことを考えているうち、ルイサに教えてもらった武器屋に到着。悩んでいてもしょうがないので、中に入る前に釘を刺しておくことにする。
「トビ」
「んー？」
「んー、じゃない。武器屋に着いたぞ」
「お、いつの間に。服に夢中で気づかなかった」
「ああそう。中に入る前に言っておくことがある」
「なんだ。どうした。愛の告白か？」
俺はノンケだ、あほうが。
「違う。いいか、お前は武器にいっさい触るな。そして、俺の側から離れるな」
おおっとお、なんだか告白みたいになってしまったではないか。
しかし、こうでも言っておかないと、こいつは何をしでかすか分からんのだ。
「わかった。オレを側に置いておきたいんだな？」
「気持ち悪い言い方をするな」

「キキー、トビー。早く中に入ろう」
「……そうだな」

「いらっしゃあーい！！」
武器屋に入ると、店主の豪快な声に出迎えられた。
武器屋というだけあって、中には様々な武器が置いてある。剣に槍に薙刀に弓……さすがに銃は置いていないが、他にも色々とある。こういった店は初めてなので、かなり新鮮だ。
「おお！？」
「かっけー、武器かっけえ！！」
予想通りの反応を見せるリーリエとトビ。中には旅人と思わしき客が居て、騒ぐ二人を何事かと言わんばかりに見ていた。
「気持ちは分からんでもないが、あまり騒ぐな」
って興奮しすぎて聞こえてないな。あのテンションだとリーリエもいらないことをしそうだ。
「ミーニャ。俺がトビの面倒を見るから、お前はリーリエがいらないことをしないように見ててくれないか？」
「そうやってミーニャのいないスキに、また別の女の子と仲良くするんですね。いやらしいにゃ」
お前は彼女か。しっぽ引き千切るぞクソ猫が。
「店内を良く見ろ。お前とリーリエ以外に女性はいないだろうが」
「そんなことには騙されませんにゃ。こっそりと外に抜け出すのは目に見えてますにゃ」
目ん玉えぐるぞあほう。
「そんなことはしない。一人でトビとリーリエの面倒を見るのはつらいんだ、だから頼む」
「嫌ですにゃ」
言って、ぷいっとそっぽを向くミーニャ。
「さっきから何を怒ってるんだ、お前は。意味が分からないぞ」
いい加減ミーニャの態度が腹立たしくなってきた俺は、少しばか

りきつめの口調で言ってしまった。
「にゃ……」
みるみるうちにオッドアイの瞳が潤んでいく。
おいおい……まさか泣くんじゃないだろうな。ちょっと口調がきつくなっただけだぞ。
「あ、ヤベ」
不意にトビの声が聞こえてきた。その瞬間――
側頭部に衝撃がはしり、ぷっつりと意識が途絶えた。

◆

キキが武器屋で気絶したころである。
政務に励むオルタのもとへ、アインデルが訪ねて来ていた。
「忙しいところすまぬの」
「いえ、ちょうど休憩をとろうと思っていましたので」
オルタは言いながら飲み物の入ったカップをガラステーブルに置く。カップの中には高級の葉を使用した飲み物が入っている。以前、オルベールを訪れた行商人からゲローブが購入したものだ。
「ほう。この色はグリーンラッド産の葉かのう？」
「当りです。貴族の御用達だというのに、さすがはアインデル翁です」
「今でこそ貴族にしか買えぬ代物じゃが、昔は誰にでも買える物だったでな」
「そうでしたか。いやはや、知りませんでした。お恥ずかしい。して、本日はどのようなご用件ですか？」
アインデルがオルタのもとへと訪ねてくるのは珍しいことだ。アインデルは御年八十と五になるため、腰の具合が良くなく、あまり外を出歩きはしない。そのため、腰の悪いアインデルが自ら訪ねて

きたことに疑問を感じていた。
「実はの、異世界からやってきた小童に渡したいものがあってな」
「申し訳ありません。二人は街に買い物に出かけています。それと、買い物がすんだらアインデル翁に合ってみてはどうかと、私が勧めてしまったので、もしかしたらご自宅のほうへと向かっているかもしれません」
「そうであったか。では、小童らが戻って来るまでここで待たせてもらってもよいか？」
「ええ、喜んで。それで、渡したい物とはどのようなものなのでしょうか」
「うむ、これじゃよ」
ゆったりとしたローブの懐から、アインデルは一冊の書物を取り出した。随分と古びており、黄色く変色した表紙からは相当な年月を感じさせる。
ガラステーブルの上に置かれたそれを、オルタは目を細めて見る。
「ノ……スト……ラ物語……ノストラ物語？」
「うむ。儂が産まれるよりも前に流行った、『チキュウ』という異世界を舞台にした物語じゃ」

2―（5）

「異世界の物語……ですか」

アインデルを良く知るオルタは、キキとトビに楽しんでもらうために本を持ってきたとは思えなかった。ましてや、異世界を舞台にした物語となれば、なおのことである。

「もしかして、アインデル翁は物語の舞台となった異世界が、キキとトビ君の世界だとお考えなのですか？」

「可能性は有ると考えておる。この物語の冒頭はな、『これは、私の実体験だ』という主人公の語りから始まるのじゃ」

「なるほど。本当に作者が実際に経験した話しだとお考えなのですね？」

アインデルはゆっくりとうなづいた。

「作中には個性的な名前の人物や道具が数多く登場する。例えば、ゴンゾウ・カネコ、ジュウ、ゼロセンなどじゃ」

「確かに個性的ですね。例に挙（あ）がったものがなんなのか、まるで想像がつきません」

個性的すぎる。想像すらできない名称（めいしょう）というのはいかがなものかとオルタは思う。

ただ、それだけで作者が異世界に行ったとは断定はできない、しかし彼は、作者が本当に異世界に行ってきたのではないかと感じていた。

「なんにせよ、小童らに読んでもらいたいものじゃ。もしも、作者が本当に異世界に行ったのであれば、この本がきゃつらの役に立つやもせぬ」

「そうですね。ところで、彼らが帰ってくるまで、この本を読んでいてもよろしいでしょうか？」

「それはかまわぬが、政務をしなくてもよいのか？」

「それは……後でどうにかします」

「ふむ。よほどこの本が気になるようじゃな」
「まだまだ私も若いということですよ」
言ってオルタは子供のように笑った。後々、政務で無理をすると分かっていても、どうにも、好奇心には勝てなかったらしい。

◆

「まさか、こんなにも早く再開するなんて思ってなかったよ」
「同感だ」
ずきずきと痛む頭を触りつつ、俺はぎろりとトビを睨む。
「そんな怒るなって、ちょっと鉄球が当たっただけじゃん」
「ちょっとだと？　ふつう死ぬぞ」
「いや、ほんとだよ。だというのにコブだけなのだから奇跡だよ」
異世界の人間というのは、身体が丈夫なんだな。うんうん、と勝手にうなずいているおっさん。
武器屋で気絶した俺はトビたちによって医術院に運ばれたらしい。気が付けば頭に包帯が巻かれ、目の前でおっさんが覗き込んでいたので、それはもう驚いたたものだ。
「キキさん、大丈夫ですかにゃ……？」
「少し痛むが、大丈夫だ」
心配そうに覗き込んでくるミーニャ。どうやら、このごたごたで機嫌が悪かったのはふきとんだらしい。不幸中の幸いとは、このことだろう。
「キキが無事で良かった、リーリエ、すごく配したぞ」
「それは悪かったな。ところで、俺はどれくらい寝てたんだ？」
「かれこれ四時間ほどだね」
言われて窓の外に目を向ける。日はすでに沈んでおり、外には黒が満ちていた。

「夜になってたのか」
はあ、などとため息をつく。今日はもう遅い、武器の購入とアインデルという老人の話は明日にしたほうがよさそうだ。
「キキさん、今日はもう帰りませんか？」
「俺もそう思っていたところだ。残念だが、帰ろう」
「それがいい。時間も二十時をまわっているしね」
ああそうか、夜の八時をすぎてるのか。ってちょっと待て。
「いま、時間を言ったか？」
「ん？　言ったが、、それがどうしたんだい」
何かおかしなことを言ったのか、と不思議そうにおっさんは訊いてくる。おかしいのではない、驚いたんだ、俺は。
「いや、なんでもない」
中世のヨーロッパ風、しかも、こんなファンタジーな世界に時刻の概念があると誰が思うよ。元の世界で見慣れていたからだと思うが、いまさらながらに木製の掛け時計があることに気が付いた。というか、何で動いてるんだ、あれ。
「魔法、いや、魔術ってところか？　まあ、なんでもいいか……さて、そろそろ行くかな」
「そうだね、それがいいよ。眩暈や吐き気といった症状が出たら、またここに来てくれたまえ。夜中でも大丈夫だからね」
本当に医者の鏡だな、睡眠時間を削ってでも患者が優先か、たいしたものだ。
「分かった、そのときは遠慮せずに頼らせてもらう。また世話になったな、じゃあ、俺たちは帰るよ」
「ああ、気を付けて」
おっさんに別れを告げて医術院を出る。
医術院の外はすでに街灯が灯っており、ぼんやりとした魔術の明かりが大通りを照らしていた。そのため、朝や昼ほどではないが人が行き来していて、夜の独特な雰囲気がでていた。
「夜になると人が居なくなるかと思っていたが、そうでもないんだ

な」

「夜になると酒場が開きますので、お仕事帰りや呼び込みの人たちで賑(にぎ)やかになりますのにゃ」

「キャバクラとかあんのかな、かな？」

「あっても行かないからな」

「きゃばくら？」

首を傾(かたむけ)けて疑問の声をあげるリーリエ。もちろん俺はスルーだ。

雑談をしながら夜の街を歩く俺たち。領主館に向かう道中、すれ違う街の人たちや呼び込みの人に声をかけられては、立ち止まって話しをする。

特にリーリエに声をかける者が多く、そのたびにリーリエは街の人たちと楽しく会話をしていた。リーリエほどではないが、ミーニャも街には知り合いが多いらしく、たびたび声をかけられていた。

また、呼び込みの女の子がトビに声をかけるものの、「おっぱい触らせてくれよ」と言われてびんたをみまっていたりもした。

三人に比べて俺は声をかけられることは少ないが、それでも俺と話したい物好きも何人かいた。リーリエとミーニャは別として、俺とトビはゲローブの件で人気があるようだ。

しかし、俺に対する街の人の反応には酷いものがある。全員がキキ『様』と呼び、やたらと低姿勢で偉大な人物のように接してくる。ふつうの高校生の俺としては、背中がかゆくて仕方がない。

「おや、キキたちじゃないか」

本日七回目となる呼び込みの女の子のびんたが、トビの頬(ほほ)に炸裂(さくれつ)したとき、誰かに声をかけられた。

「オルタ！」

走り寄ってオルタに抱き着くリーリエ。俺たちに声をかけてきたのは、オルタときのうのアインデルという老人だった。

2－（6）

「やあ、我らが街の友人。それと、英雄の二人とミーニャ君」
「こんばんわですにゃ、オルタさん」
「英雄はやめてくれ。恥ずかし過ぎる」
「オルタ、この街の女は凶暴だな」
頬をさすりつつ、何食わぬ顔でトビがそんなことをのたまった。
「ほっぺたが腫れているけど、、」
「おっぱい触らせてくれって言ったらぶたれた」
「ほっ、若いのう」
アインデル、だったな、がにこやかに口にした。
「なんだじじい、お前はおっぱい触りたくないのか」
「若いときに揉み飽きたでな、今はさして興味がないのう」
酷い返しだな！
「マジか、どんだけ揉んだんだ？」
「ざっと二百くらいかのう」
「すげえ……弟子に、弟子にしてくれ！！」
何を学ぶ気だ貴様は。
「じーじ、おっぱいってどうやったら大きくなるか知ってる？」
「リ、リーリエちゃん、女の子がお……そんなはしたないことを言ってはだめにゃ！」
リーリエの質問が突然すぎる。そもそも、どうして胸の話題になった。
「そうじゃのう。良く食べて良く運動し、良い子にしておれば大きくなるやもしれんぞ」
「そうか！　リーリエ、いっぱい食べていっぱい運動して、良い子にするぞっ」
上手いことまとまった……のか？　まあ、年の功を感じる言いまわしだったな。

「師匠、ちん――」
「はーいストップストップ。しょうもないことを訊こうとするな、あほう」
「しょうもなくないっ、キキはいいよな。でか――」
「それ以上口を開いたらお前を殺す」
「はい、ごめんなさい」
まったく、人の気にしていることを……
「みんな仲が良くて結構なことだ。それはそうと、キキ、私とアインデル翁は食事に来たんだけど、一緒にどうだい？」
「それで外に出てたのか。むしろ、俺が頼みたいくらいだ」
「そうか、それじゃあみんなで食事と行こうか」
おおー！　なんて声をあげる、あほうと女二人。無駄に元気だな、まったく。

賑やかな喧騒に満ちた酒場。いたるところから笑い声が聞こえ、どこも大盛り上がりだ。それは俺たちのテーブルも同じで、トビを除き、全員が話を弾ませていた。
ちなみにトビは。
「おらっ、どうよ！　酒豪王、トビ様とはオレのことだ！！」
まったくもって経緯は不明だが、いつの間にかいないと思ったら、他の客を巻き込んで飲み比べをしていた。ちょっとしたイベントになっていて、すでにトビは五人も潰している。
「いやあ、トビ君は強いね。もしかしたら、異世界のお酒はこちらの世界よりも度数がきついのな？」
「さあ、どうだろうな。酒のことは良く分からん」
「トビさんには人を惹きつける魅力がありますにゃ、いつも人の輪の中心にいますにゃ」
「良くも悪くもだけどな」
言って俺は野菜炒めのような料理を口にした。そしてミーニャに抱かれて眠るリーリエに視線を変える。

「良く眠っておるでな」
真っ白なアゴ髭をしごきつつ、じいさんが口にした。その目は孫を見ているかのように優しげだ。
「だな。今日はけっこう歩き回ったし、疲れてたんだろう」
「左様か。儂の自宅はちと遠いでの、行ったあげく無駄足を踏ませてしもうたの」
「それが、じいさんの家には行って――って、俺たちが訪ねることを知ってたのか？」
「ああ、それはだね。アインデル翁が領主館に足を運んでくれたので、私が言ったんだ」
「そうか。ちょうどいい、色々と話を聞かせてほしいんだが、いいか？」
「構わんよ。そのかわりと言ってはなんじゃが、領主館に戻ったら、オルタから本を受け取って読んでほしいのう」
「あー……悪い。実はこの世界の文字が読めないんだよ、俺」
「ふむ、そうであったか。ならば、読み書きを覚えて読んでほしい」
「わかった。読んで感想を聞かせればいいんだな？」
「うむ。して、儂に訊きたいこととは？」
本を読んで感想を聞かせて欲しい。などと妙な頼みをするものだ、と思いながらも俺は質問をすることにした。
「単刀直入に訊くが、元の世界に帰る方法、もしくは異世界に行く手段を知らないか？」
この世界には世界間の移動といった技術は確立されていない、と、以前ミーニャに訊いたので、今回は裏ワザ的なものがないかを訊いてみた。長い年月を生きてきたじいさんなら、もしかしたらそういったことを知っているのではと思ったのだ。
「悪いが異世界に行く術は知らぬ。しかしじゃ、その術には心当たりがあるでな」
「本当かっ」
「わっ、キキさん、落ち着いてくださいにゃ」

「ああ、悪い……」
勢いあまって乗り出してしていた身体を元の位置へと戻す。ダメもとで訊いてみたので、これはかなり嬉しい。
「それで、心当たりって？」
「うむ、『古代魔法』じゃ」
「古代魔法？」
名前からして、遥か昔に使われていた魔法ってところだろうか。
「『マナ』の濃度が高かった古代の時代に使われていた、失われた秘術のことじゃ」
「ちょっと待ってくれ、マナってなんだよ」
「それはミーニャがご説明いたしますにゃ。マナ、というのは魔術や魔法の元となる自然エネルギーで、空気のようなものですにゃ」
つまり、魔術や魔法を使うにはマナが必要不可欠ということだ。車で例えるならば、マナはガソリンといったところなんだろう。
「分かりやすい説明だ、助かる」
「ふにゃ……喜んでもらえて良かったですにゃ」
ミーニャは褒められて嬉しいらしく、ふにゃんと耳が垂れ、尻尾がぴこぴこと動いていた。感情表現も実に分かりやすい。
「じいさん。失われた秘術ってことは、今の時代には使える人がいないってことか？」
「左様。高濃度のマナを基準にして創られた古代魔法ゆえ、濃度の薄くなった現在では行使できぬ」
「じゃあ、濃度が足りていれば使える人はいるのか？」
「ふむ……アンブロジウスならば使えるやもしれん」
「誰だそれは、そもそも名前か？」
「元・王都所属の研究者で、数少ない魔法使いだよ」
オルタが口を挟んだ。そして続ける。
「アンブロジウスは、マナの自然定着理論を編み出した人で、これによって一部の物にマナを溜めることができるようになり、魔術師でなくとも魔術道具を使えるようにしたんだ」

「ようは、この世界の人々の生活を豊かにした魔法使いってことだな？」

「簡単に言ってしまえば、そういうことだね」

俺たちの世界で言うところの、エジソンやライト兄弟みたいな人だ。というか、自然定着なんちゃらとか専門的なことは勘弁してほしい。

「アンブロジウスはマナ研究の第一人者であり、古代魔法も研究しておった。取りあえず、合ってみてはどうじゃ？」

今は使えないとはいえ、古代魔法とやらが元の世界に帰る手がかりならば、それについて詳しいことを知っておくべきだ。

可能性とは、自らで見つけるものなのだから。

「そうだな、そうする。どこに居るんだ？」

「今は隠居（いんきょ）して、故郷（こきょう）のグリーンラットという街にいるんじゃないかな？」

って、この街には居ないのかよ。ということはだ、魔物なんていう危険極まりない生物がいる街の外に出なければならないわけだ。

最悪だ。何が悲しくて、命をかけた冒険の旅をしなきゃならんのだ……

2－(7)

「ため息なんてついて、どうしましたにゃ？」

　ＲＰＧゲームみたいな冒険の旅にでなきゃならんのだ、そりゃあ、ため息の一つも出るというものだ。何せ、ゲームとは違って、セーブやリセット、蘇生ができない死んだら終わりのリアルだ。出来れば遠慮（えんりょ）したい。

　しかしだ、元の世界に帰るためには、グリーンラットのアンブロジウスという魔法使いに合わなければならない。合えても、情報収集だけで終わってしまいそうな気もするが。

「なんでもない」

　ミーニャに返事をし、旅に出るには何が必要かを考える。やはり、いちばんに思いついたのは武器、次にお金と食糧（しょくりょう）、テントや着替（きが）え、あとはキャンプなどで使う飯盒（はんごう）といった細々（こまごま）した物。地図なんかも必要だ。

「小童、旅に必要な持ち物ならば、儂が見繕（みつくろ）っておいてやろう。武器や着替えは各々（おのおの）で用意してもらわねばならんがな」

「本当か？　それは助かる」

「キキ、武器はゲローブの宝物庫から選んではどうだい？　大半は実用できる物じゃないけど、中にはお店では手に入らない業物（わざもの）や逸品（いっぴん）があったよ。良い魔術道具もそろっていたしね」

「わかった、そうする。できれば、武器や魔術道具ってのに詳しいやつの助言がほしいんだが」

「それならば、ハンセンところのルイサに手伝ってもらうとええじゃろう」

「ルイサにか？」

「すでに知り合いであったか。ルイサは武器屋のハンセンの娘でな、将来は親の後を継ぎたいらしく、そっち方面の勉強をしておるのじゃ。知識だけならば、ハンセン以上じゃ」

「そうだったのか、それは知らなかった。じゃあ、ルイサに頼むかな」
「旅に必要な道具を見繕ったあと、儂が声をかけておこう。昼までには領主館に向かうでな」
「ああ、頼む。俺とトビはそれまでに個人的な物を用意しておく」
「うむ、これで決まりじゃな。にしても小童よ、ルイサに頼むと言ったときの顔、少し緩んでおったぞ」
「む……！」
隣りのミーニャから、何やら不穏なオーラを感じる……いや、きっと気のせいだ。
「キキさん。鼻の下を伸ばすのはどうかと思うのですにゃ。良からぬことを考えているのが丸見えなのですにゃ、にゃっ！」
なぜ威嚇されているんだ。俺が何をしたっていうんだ、ちくしょうが。
「ははは、いやあ、若いって良いものですね、アインデル翁」
「ほっ、まったくじゃ」
何が若さだ、意味のわからんことをいうな。
隣でぐちぐちとぼやいているミーニャを無視しつつ、俺はその日の食事を終えた。余談だが、トビは三十人ほどを呑み潰し、帰りに何度もゲロっていた。

翌日、朝食を食べ終わった俺はオルタに用意してもらったリュックに、きのう買った衣類を詰め込んでいた。トビは、「頭が痛い気分が悪い」と行動不能なので、仕方なく代わりに詰めてやった。
ミーニャとリーリエは朝食を終えると自室に戻ったらしく、何をしているのか不明だ。
まあ、どうでも良いことだ。その二人は俺とトビの旅にはついてこないのだから。
『キキさん、少し相談をしたいことがありますにゃ』
丁寧にノックを鳴らし、扉の向こうからミーニャが声をかけてき

た。それに対し、開いているから入っていいぞと返事をした。
失礼しますにゃ、と部屋に入ってきたミーニャ。
「お忙しいですかにゃ？」
「ちょうど準備を終えたところだから、大丈夫だぞ。で、相談って？」
「あのですにゃ、ミーニャ、きのうは服を買っていないので、着替えは草原の家にあるんですにゃ」
「……そうか、それがどうかしたのか？」
「だからですにゃ、ミーニャ、リュックに詰める着替えが無いんですにゃ」
「リュックに着替えって……お前、俺とトビについてくるつもりか？」
旅支度（たびじたく）ができなくて困っている、ということだろう。しかしだ、ミーニャが俺とトビについてくる理由がわからない。俺とトビは元の世界に帰る情報を得るため、グリーンラットへと旅に出る。けれども、ミーニャの世界はここなのだから、俺たちについてくる理由がないのだ。
「当たり前のことを訊かないでほしいですにゃ、当然ついていきますにゃ」
「どうしてついてくるんだよ」
「それは、それは、それは……？」
俺に訊かれても困る。
「なんとなくですにゃ」
「あのな、この世界に魔物がいるのは知ってるだろ。それなのに、なんとなく、で危険な旅についてくるあほうがいるかよ。理由がないのに命をかけるな」
遊び半分でついてこられると困る。それに、一人増えるだけで、旅の資金や食糧の消費が増えるしな。
「キキさん……ミーニャのことを心配してくれてるんですかにゃ？」
「いちおうな」

本当は、おもに資金繰りのほうを心配しているんだが。

「嬉しいですにゃ……ミーニャの身をそこまで案じてくれているだなんて……ふにゃ」

甘々なデザートを食べているかごとく、ふにゃふにゃした顔でふにゃふにゃと言っているミーニャ。気持ち悪い、勘違いお疲れと言いたい。

「でも、ミーニャなら大丈夫ですにゃ。なぜなら、こう見えてミーニャは獣人族の戦士ですし、しかも、補助魔法も使える万能戦士ですにゃ。魔物なんかに退けはとりませんですにゃ」

先程とはうって変わり、ミーニャは豊満な胸を張って自慢げに言う。

真偽はどうであれ、戦力になるのならば消費うんぬんを差し引いても連れて行かないこともないんだが、いかんせん、ミーニャは面倒くさい。とつぜん拗ねるし怒るし威嚇してくるしで、一緒に旅をしたくはない、というのが本音だったりする。

旅先で何をしでかすか分からないトビ、ときたま意味不明な態度をとるミーニャ。三人で旅をしたら、きっと俺はストレスで死ぬ。そんな気がする。

「ミーニャあ！　リーリエ、旅の準備おわったぞ！」

と、元気よく部屋に現れたリーリエ。どうやら、こいつもついてくる気らしい。

「お利口さんですにゃ、さす――」

「リーリエ」

「ん？　キキは旅の準備おわったか？」

無邪気な笑顔で訊いてくるリーリエ。しかし、俺はこれからその笑顔を曇らせなければならない。

これればかりは自分のためじゃない。

2－（8）

「リーリエも俺とトビについてくるつもりなのか？」
「キキとトビのおかげで街に戻ってこれたのだ、だから、リーリエは恩返しをするためについていくぞ！」
計算も邪心もない、どこまでも抜けるような笑顔で彼女は言う。
この笑顔は疲れ切った心を癒し、人々に希望をあたえる。
オルタを領主に迎え、オルベールの街は再スタートを切った。けれども、本当に大変なのはこれからで、オルベールの街は様々な問題に直面するだろう。もしかしたら、どうにも出来ない壁にぶち当たるかも知れない。
努力しても乗り越えられない壁が立ち塞がり、街に翳が降り、人々が絶望に顔をうつむける。
俺は思うんだ。
うつむけたさき。小さな妖精が、まばゆいまでの満面の笑みで、『みんなでがんばろう！』、そういうだけで、翳も絶望も吹き飛ぶんじゃないかって。
だから俺は、
「リーリエは、連れて行かない」
彼女の顔を曇らせるんだ。
「ど、どうして、キキはリーリエが嫌いなのか……？」
「そうじゃない。嫌いだとか、好きだとかいう話じゃないんだ。これからさき、リーリエはオルベールの街に必要なんだ」
「でもっ、でもっ、リーリエはキキたちに恩返しがしたいぞ」
「だったら、なおさら街に残って街の人たちの側にいてやってくれ。それが、俺たちへの恩返しになる」
「でも……」
哀しげにうつむくリーリエ。もともと小さな身体がいちだんと小さく見えた。

単純に、リーリエは俺たちと別れたくないのだろう。理由は簡単だ、友達と別れたくない。きっと、それだけなんだ。

「リーリエ、一つ約束をしよう」

「約束……？」

彼女は恐々と顔を上げる。先程の満面の輝く笑みとは違い、そこには哀しみと怯えが広がっていた。

「ああ。元の世界に帰る方法が見つかったら、もう一度、この街に帰ってくる」

「本当か？」

「約束する。絶対だ」

少しのあいだ、リーリエは何やら考えたあとに口を開いた。

「分かった、リーリエ、街で待ってる。でもな、一つお願いがあるぞ……」

言葉にし、もじもじと言いづらそうにしながら、ときおりちらちらと俺を見上げてくる。

なんだか、とてつもなく嫌な予感はするが、話しの流れ的に訊いてやることにする。

「……お願いってなんだ」

「あのな、リーリエな、キキとな、ふーふになりたい」

「ふーふ？」

言葉の意味が分からずにおうむ返しをしてしまう。ふーふなんて言葉は――まさか、、

「うむ、キキと家族になりたいぞ」

「かかかか家族って、キキさんと、けっ、結婚かにゃ！？　夫婦かにゃ！？」

なぜお前が動揺（どうよう）している。それにしても、ふーふ、夫婦ときたか。これはまいった、どうしたものかな。

「夫はな、必ず嫁の元に帰ってくるものだってフルエが言ってた」

フルエって誰だよ、死ねよフルエ。

「だからな、キキとふーふになっておきたいぞ」

とどのつまり、俺のした約束の証として夫婦になりたいということなんだろう。しかし、また妙な展開になってしまったな。

まあ、必ず帰って来てくれというだけの意味で、それ以上の深い意味はないだろうし、子供のいうことだからうなづいておけばいいか。

「わかった、俺とリーリエは今から夫婦な」

「にゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

！？　ミーニャが発狂しだした、なんだこいつ、危ないやつだったのか？

「ミ、ミーニャ、どうしたのだ？」

「キキさんの馬鹿あああああああああああ！！！！！」

「ミーニャ！？」

それだけを言い残し、部屋から走り去って行くミーニャ。なんなの、どうして俺は馬鹿って言われてんの、というか走るの速いな。

「キキ、ミーニャが！」

「安心しろ、ずっと我慢していたトイレに行っただけだ」

「そうなのか？」

「そうだ、だから気にするな」

「そうか。なら安心だなっ」

リーリエは単純で扱いやすいから助かる、この素直さは長所だな。

「キキ、ちょっといいかい？」

と、開け放たれた扉からオルタが姿を見せた。おそらく、じいさんとルイサが館に到着したのだろう。

「じいさんとルイサが来たのか？」

「ああ。ところで、廊下でミーニャ君とすれ違ったのだけど、喧嘩でもしたのかい？」

「してない。それより、じいさんたちのところに案内してくれ」

「トビ君は？」

「頭が痛いから寝てる。トビの武器は俺が選ぶから寝かせてやって

くれ」
「わかった。それじゃあ、宝物庫に移動しよう」

オルタに連れられ、俺とリーリエは宝物庫へとやってきた。すでにじいさんとルイサも来ており、二人は室内の物を物色しながら雑談をしていた。

室内はちょっとした展示場となっており、武器や鎧、ペンダントや宝石といったものが置かれていた。西洋の歴史博物館、といった装いだ。

「キキ様」
「なんじゃ、お主らだけか」
俺たちに気づいた二人が側へとやってきた。
「トビは体調不良で寝てる、ミーニャは所用だ。それよか、わざわざ来てもらって悪いな」
「いえ、呼んでいただけて光栄です。役にたてるか分かりませんが、頑張らせていただきたいと思います」
いやあ、ルイサはほんっとお淑やかで良いな。どこかの発狂猫に見習わせたい。
「また、鼻の下を伸ばしてますにゃ。いやらしいにゃ」
背後からいやに低い声がかけられた。誰かは分かっているが、振り向いて確認をする。
「なんだ、居たのかミーニャ」
「ミーニャに居てほしくないような言い方ですにゃ」
良く分かってるじゃないか。発狂する危ないやつとは一緒にいたかないんだよ。
「ふむ……して、ミーニャちゃんとリーリエちゃんは小童どもについて行くのかね？」
「ミーニャはついていきますにゃ」
やっぱついてくるのかよ、これって断れないのか？
「リーリエはな、キキの嫁だから街で帰りを待つぞ」

「ほう」「おや、いつのまに」「お嫁さん……」リーリエの発言を聞いて、じいさんとルイサとオルタは三者三様の反応を示す。反応はそれぞれ違うが、全員が俺を見ていた。
「なんだよ。お前らなら、事のいきさつに察しがつくだろ」
「あ、はい。もちろ――」
「いやあ、めでたいことじゃ。小童が旅から帰ってきたら祝言を挙げねばな」
「ですね。そのときは街をあげて盛大にやりましょう、アインデル翁」
こいつら、察しがついてるのに言ってやがる。悪ふざけを……っ
「さて、小童がちゃんと帰って来れるよう、武器選びに励まねばな。のう、ルイサ」
「あ、その、はい。頑張ります」
俺のターンは無しかよ。ちくしょう。
俺の反撃は許されず、そのままなし崩しで武器選びが始まった。

2－（9）

武器選びについてだが、ルイサとオルタがいくつか武器を厳選し、その中から説明を聞いて俺が決める、というやり方だ。

二人が選んでいるあいだ、俺は、じいさんが持ってきた旅に必要な道具の説明や心得について教えてもらっている。ちなみに、ミーニャとリーリエは宝物庫の物を見学して楽しんでいた。

ミーニャとリーリエ帰れよと思いつつ、俺はじいさんの話を聞き終える。そして、ちょうど聞き終えるとルイサとオルタからお呼びがかかった。

「選び終わったのか？」

「はい、取りあえず一まとめにしておきました」

「みたいだな。さっそく説明を頼む」

「わかりました、まずはトビさんにお勧めする物からご紹介させていただきます。トビさんにはモーニングスターやハンマー、ナックルといった打撃系が良いかと思いましたので、三つのうちのどれかが良いと思います」

「俺もそう思う」

さすがはルイサだ、あまり接点がないというのに良く分かっている。

トビの場合は槍や剣といった技術を必要とするものよりも、叩く殴るといったシンプルな作りが良い。理由は簡単だ、あいつがあほうだからだ。

「じゃあ、トビはナックルにしようと思う」

「あの、まだ説明をしていないのですが……」

「旅をする以上、武器は軽いほうがいいし、何より、モーニングスターとハンマーは持ち運びには向かないだろ？」

「あっ……」

どうやら武器の性能にしか頭がいってなかったらしく、ルイサは

小さく声をあげた。
「す、すいません」
「謝らなくていいって、それより、そのナックルについて説明してくれないか？」
「は、はい。このナックルはビラッドという魔物の皮で出来てまして、非常に硬く、すべりづらくなっているので、威力を殺すことなく相手に伝えることができる逸品です」
硬いうえに滑り止めがついているため、大ダメージをあたえられるってことなんだろう。滑り止めがつくだけでダメージがアップする理由は分からんが、まあ、俺が使うわけじゃないので理屈なんかどうでもいい。
「そうか、じゃあトビの武器はそれにする」
「まいどあ――じゃ、ないですね。つい癖で」
まいどあり、と言いかけて照れた笑みを浮かべるルイサ。てへっ、などと言って舌を出すぶりっ子猫の仕草とは違い、ルイサの仕草は俺を癒してくれる。眼福だ、本当に。
「キキさん、顔がえっちいですにゃ」
「どこがだよ。そんなことより、次はお前が武器を選べ」
「命令しないでほしいですにゃ」
言って、ツンとそっぽを向く。癒されたはずの心は殺意へと激変だ、いつか耳と尻尾を引き千切ってやる。
「えと、ミーニャちゃんは獣人族でありながら魔術も使えるので、マジックボウを選んでみました」
「マジックボウなんて凄い物があったのかにゃ！？」
「じいさん、マジックボウって？」
ルイサがミーニャに説明をしているあいだ、俺はマジックボウとやらについてじいさんに訊く。
「一言でいってしまえば、魔力の矢を放つ弓矢じゃな」
「矢を持ち運ばなくていい弓矢か。便利だな」
「それだけではないぞ。弓に魔力を流し込むだけで矢が生成できる

ゆえ、速射ができ、流し込む魔力量で威力の加減や飛距離の調整ができる優れものじゃ」

「そのかわり扱いが難しそうだな」

「そうじゃな、流し込む魔力量の調節は感覚で覚えねばならんしのう」

「ミーニャにそんな器用なことができるのか？」

いや、できまい。ミーニャはバカだから。

「修練を積めばできるじゃろうて」

「だといいけどな」

ルイサの説明を熱心に聞いているミーニャを見つつ、俺はそんなことをつぶやいた。

そして、いよいよ俺が武器を選ぶ順番がやってきた。

「キキさんには、こちらの三つを選んでみました」

彼女が選んでくれたのをざっと見てみる。

一つはレイピア、刀身部分が細く、突きに特化した剣。二つ目はダガー、刺すことと投げることに向いた短剣。三つめは、

「これ、刀じゃないか」

それも、鍔の付いたちゃんとしたものだった。

「刀？　これはドライドという武器なのですが……」

「ドライド？　いや、これは、、ああなるほど。この世界じゃあドライドっていうのか」

「もしかして、キキの世界にも同じ武器があったのかい？」

「ああ。俺の世界、それも、俺の居た国でだけ使われていた武器だ」

それにしても不思議だ。独自の文化を進んできた日本だからこそ、刀が生まれたんだが……

「キキ様、よろしければドライドについて詳しくお話ししましょうか？」

「ん、頼む」

では、と前置きをしてからルイサは話し始めた。

「ドライドは、遥か南の島国のドライド島で生まれた武器です。斬

る、ということに関しては他に並ぶ物がないほどに優れた逸品中の逸品です。しかし欠点があり、強度が弱く、上手に扱えないと簡単に折れてしまいます」

「俺の世界の刀と同じだな。扱いの難しさは別として、強度が――って、魔術があるのに改善されていないのか？」

「えと、魔術が何か……」

関係あるのか、といった顔だ。

「この世界には物を硬くする魔術ってないのか？　単純に考えてだ、強度を上げてしまえば刀に敵う武器はそうそうないと思うんだが」

「あ、、確かに。ドライドは扱いの難しさと、その美しさから美術品として定着してしまい、あまり武器としては普及していなかったので……」

ルイサの物言いからすると、強度を増す魔術はあるらしい。が、扱える者がいなかったために美術品になったということだろう。

「ミーニャ、強度強化の魔術は使えるか？」

「使えますにゃ。ただ、効果があるのは一時間くらいですにゃ」

「それだけあれば充分だ」

魔物と戦うときに使えればいいのだから、一時間だけで問題はない。効果がきれても、再度強化してもらえればいいしな。

「ドライドにいたしますか、キキ様」

そうルイサに問われ、少し考えてみる。

近接戦において『折れづらい刀』というのは最強ではないかと思う。突いてよし、斬ってよし、受けてよしの三拍子がそろっているのだ。とはいえ、他の武器よりも扱いづらい刀を、はたして一介の高校生に扱いきれるかどうかが問題だ。

いや、使い手が未熟なのだから、せめて武器は強くあるべきだ。やはり、ここは刀でいこう。

「そうだな、刀にする」

「分かりました。キキ様なら、きっとドライドを使いこなせると思います」

「だといいがな」
床に置かれた刀を手に取ってみる。
けっこうな重さだ。そしておもむろに刀を抜き放つ。
「おお、きれいなのだ！」
「凄いな……見事な造形美だ」
「かなりの業物ですね」
「刀匠の魂を感じ得ずにはおれぬのう」
見惚れているミーニャを除き、みなが口々に刀を褒め称える。無理もない、一度も使われていないであろうそれは、刃こぼれ一つなく、波紋は乱れなく刻まれている。
武と美の調和が、そこにはあった。
俺は思う。刀匠が技と魂を注ぎ、丹精を込めて打ったであろうそれを、使いこなせるようになりたいと。
純粋に見て見たかった、この刀が活躍する様を。
「使いこなしてみせる、必ず」
俺の決意表明を最後に、武器選びは終わった。
そして、その日の夜、トビを交えた話し合いを行い、明日の朝に旅立つことを俺たちは決めた。

2－（10）

日はめぐり、オルベールを旅立つときがやってきた。
「忘れ物はないか？」
「はい、大丈夫ですにゃ！」
「バッチリだ！」
まるで遠足に行くがごとく、無駄に元気良く返事をする二人。なぜだろうか、二人が自信を持って返事をすると不安になってくる。
「本当だろうな……まあ、いい。オルタ、リーリエ、それじゃあ俺たちは行く」
「いや、街の出入り口までは付いていくよ。それと、キキにこれを」
言って、オルタが差し出してきたのは古ぼけた書物だった。何やら表紙に文字が書いてあるが、残念ながら俺には読めない。
「以前、酒場でアインデル翁が言っていた本だよ」
「読んで感想を聞かせて欲しいってやつか」
本を受け取ってぱらぱらとめくってみる。これは読むのに苦労しそうだ、何せ、文字だらけで挿絵が一つもない。まあ、文字の勉強にはちょうどいいだろう。
「確かに受け取った、それじゃあ見送り頼む」
背中のリュックに受け取った本をなおし、全員で領主館を後にした。
外は晴天に恵まれ、雲一つない青空が広がっている。絶好の旅立ち日和だ。
「って旅立ち日和って……」
「どうかしたかい、キキ？」
「いや、なんでもない」
リュックを背負った三人、それとオルタとリーリエの五人で大通りを進む。朝も早いためか、あまり人は見当たらない。
ふと、朝早くから営業をしている露店に目がとまった。

「悪い、ちょっと待っててくれ」
「どうした、便所か？」
「違う」
不思議がる四人から離れ、俺は露店で帽子を買った。それを持って四人のところへと戻る。
「ミーニャ、これを被っとけ」
「え？」
「耳を隠せってことだ。また貴族と揉めるようなことがあったとき、獣人族だって分かると色々と面倒だろ？」
「そう、ですにゃ」
キャスケットに良く似た帽子を受け取り、さっそく被るミーニャ。大きめの帽子だからすっぽりと耳が隠れた。尻尾はじいさんが持ってきてくれた旅用のマントの下に隠れているので、そちらは問題がない。ちなみに、マントは俺とトビも羽織っている。
「キキさん」
「なんだ？」
「ありがとうございますにゃ。この帽子、一生大事にしますにゃ」
「……ああ、うん」
なんとまあ、恥ずかしいことを堂々といってのけるやつか。というか大事にしなくていい、なんか、気持ち悪いし重い。
上機嫌のミーニャを他所に、俺たちは止めていた足を動かす。
そして、街の出入り口に到着。正面には荒れた街道と、見渡す限りの草原が続いている。しばし前を見た後、俺は振り返る。
いよいよ別れの時だ。
「オルタ、色々と世話になったな」
「いや、世話になったのは私のほうだよ。ありがとう。」
「……どうも、こういうのは苦手だ」
口にして、先程から大人しいリーリエに視線を移す。
「リーリエ、そんな泣きそうな顔をするな」
「でも……」

「また、戻って来るって約束しただろ。だから、その、なんだ、笑って見送ってくれよ」
「キキ、キキっ」
ドン、と勢い良く俺にしがみついてきたリーリエ。我慢をしていたのだろう、涙でズボンが濡れていくのを感じた。
「リーリエはやっぱりキキたちと一緒にいたい。さみしいぞ、笑えないぞっ」
それがリーリエの素直な気持ちなんだろう。
戻って来ると約束をしたとはいえ、別れ間際に笑えというのは、お子ちゃまには酷な頼みだったのかもしれない。けれども、リーリエにはどうしても、笑って見送ってもらわないと困るんだ。
「リーリエ。俺たちは友達だ、そうだな？」
泣きながらもリーリエは力強くうなずく。
「だったら。がんばれよって、その一言に全てを込めて、笑って見送るもんだ」
そして、その一言から無限の想いを感じとれるのが、友達ってやつだろ？
だから俺は、リーリエに笑ってもらわないと困るんだ。どこに居ても、俺たちがつながっていられるように。
「……キキ」
涙でぬれる顔を上げ、大粒の涙を頬に伝わせ、リーリエはじっと俺の目を見る。そして、
「がん、ばれよっ！」
はっきりと想いを告げた。ぐちゃぐちゃな、優しい笑顔で。
瞬間、辺りで声が弾けた。
「キキ様ーー！」「あまり無茶すんなよトビこう！！」「ミーニャちゃんしっかりねー！」「必ず帰ってこいよおおー！」「ありがとうなーー！！」
いったい、どこに隠れていたのか。街の至る所から住人が姿を見せ、俺たちに声援という別れの言葉を浴びせてくる。家の窓や屋根

の上、大通り、とにかく、上下左右から雨あられと言葉が降り注いでくる。
それは地響きのようで、優しく、俺たちを包み込んでいた。
街の者には旅立つことを話してはいないのに、いったい誰がちくったのやら。まあ、分かり切ってはいるが。
「そう、呆れた顔で睨まないでほしいな。みんな、キキたちにお礼を言いたいだろうから、きのうのうちに話を回しておいたんだ」
「できれば静かに旅立ちたかったけどな」
「とか言って満更じゃないくせに、ほんと素直じゃないな、キキは！」
「うっとうしい、肩組んでくんな」
「キキさんってば、照れてますにゃ」
めんどくさいな、まったく。しかしまあ、確かに恥ずかしいが悪い気分ではない。
「さて、、そろそろ行くか」
「おうよ」
「はいですにゃっ」
二人に言ったあと、改めてオルタとリーリエに向きなおる。
「じゃあ、行ってくる」
「気をつけて」
「リーリエ、ずっと待ってるぞっ」
「ああ。またな」
最後に街のやつらに手を振り、俺たちは歩き出した。
鳴り止まぬ声が俺たちの背を押していた。
『がんばれよ』、ってな。

3－（1）キキたち＋研究所＋魔術師＝大輪の華

「ちょっ、左舷弾幕薄いよ、何やってんの！」
「やかましいっ、こっちは必死なんだよ！　自分の相手に集中しろっ！」
「にゃああ、弓が生成できませんにゃあああ！！！！」
いま、俺たちは草原の街道で魔物と戦っていた。敵は二匹で、形状は猪に良く似ている。形状は、だが。
性能は猪をかるく凌駕していて、サイ並みにでかいうえ、チーター並みに速い。そんなやつが俺とトビをめがけて何度も突撃をしてくる。はっきりいって、恐怖以外のなにものでもない。
俺の相手にしている猪もどきは次の突撃を行うため、大きく円を描くように草原を走っている。突撃をかわすことはたいして難しくはない、けれども、こちらが攻撃を当てるのがとにかく難しい。
突撃をかわしたあとに何度か攻撃を試みたが、いかんせん、攻撃をしようとしたときには、すでに猪もどきは駆け抜けている。ならば走り疲れるまでかわし続けようかとも思ったが、十回以上も突撃を繰り返しているのにも関わらず、やつの突撃速度は衰えていない。図体に見合って、かなりスタミナがあるらしい。
で、いまはこの状況を打開する方法を考え中という訳だ。
「上手に矢が生成できないにゃ、にゃ、」
ミーニャはダメだ、まったくといっていいほどに武器を扱えていないため、援護は期待できない。幸い、敵は二匹で俺とトビに向かってきているため、ミーニャを気にしなくてもいいのが救いだ。
「キキっ、次がくんぞ！」
「分かったっ、手助けはしてやれんからそっちは自分でどうにかしろよ！」
「まかせろ！！」
ドドド――っと、大地を揺るがす弾丸が俺を捉える。

着弾まで三秒もない。
すぐさま横っ飛びで緊急回避をする、影すら踏ませぬ巨大な弾丸が通り抜けて行った。数瞬遅れてやってきた風が、俺の髪を大きく流す。
このままじゃ埒が明かない。何か、いい方法はないのか？
刀を握る手に自然と力が入る。
こうなったら真正面から突き刺すか？　思うも、かぶりを振って自分を戒める。馬鹿の一つ覚えみたいに真正面から突撃をしてくる猪もどきならば突き刺すことは可能だ。しかし、そんなことをしたら衝撃で俺の身体が粉々になる、相打ちでは意味がない。
突撃をくらわずに猪もどきを倒す方法を模索する。突撃をかわしながら斬る。無理だ、俺にそんな技量はない。
「……いや、待てよ……」
一つ、一つだけある。けれども、成功するかどうかは――
「だらっしゃあああああ！！！！！！」
突如として轟くトビの雄叫び、同時に、ズドン、というとてつもない轟音が辺りに響いた。
見ると、トビが相手をしていた猪もどきの脇腹に、深く拳がめり込んでいる。猪もどきは悲鳴を挙げ、突撃した勢いのまま横転し、そのまま草原を滑っていった。
「トビさん凄いですにゃ！」
「しゃあああ、今日は猪鍋だあああああ！！」
それを言うならぼたん鍋だ、って突っ込んでる場合じゃない。
成功するかどうかは疑わしいが、さっき思いついたことを実行することにした。トビに続いてみせる。
そろそろだ、そろそろ次の突撃がくる。時間は三秒もない、が、やってみせる。
再度ぐるりと円を描き、巨大な弾丸は止まることなく俺を射線上に捉えた。勝負は一瞬、かわしながら、猪もどきにむかい、
刀を――――投げる！！！！！！！！

頼む！　真っ直ぐ飛んでくれっ。
サイドスローで投げた勢いを利用し、斜め前に飛び込むようにして回避運動をする。
通り過ぎる猪もどきの風を背に感じながら、俺は草の上で一回転をして態勢を整えた。
「どうなった、やったか！？」
すかさず猪もどきに視線を流す。
「クソっ！」
まだ、やつは動いていた。
「刀はっ」
続いて猪もどきにはじき飛ばされたであろう刀を探すべく、周囲に目をむける。
そして、見つけた。それは『成功の証』だった。
「……なんだよ、上手くいったんじゃないか」
俺が見つけたのは刀ではなく、飛び散った血液だった。言うまでもないが、それは猪もどきの血であり、猪もどきに刀が突き刺さった証に他ならない。
改めて猪もどきに目をやる。どうやら刀が突き刺さった後もしばらくは走っていたようで、百メートルほど先で力尽きて倒れこんでいた。
「キキさん、お見事ですにゃ！」
ミーニャは小走りで駆け寄ってくると、胸の前でぱちぱちと小さく拍手をする。褒められるのは悪い気分ではないが、どうにもこっ恥ずかしい。
「……喜ぶのはちゃんと仕留めたのか、確認してからだ」
「それなら大丈夫だ、ばっちりだったぞ」
どうやらトビが確認をしてくれたようで、ついでに刀を回収してくれていた。
「そうか、それは良かった」
言って刀を受け取り、血を拭いてから鞘に収めた。

「キキさんもトビさんも凄いですにゃ、とてもかっこ良かったですにゃ！」
「へっ、まあな」
調子にのるな、と突っ込みたいところではあるが、猪もどきの突撃をかわしながら拳を打ち込む、という荒業を簡単にやってのけたトビは、流石にかっこ良かった。まあ、口が裂けてもそんなことは言わないが。
「それで、お前が相手にしていた猪もどきはどうなんだ？」
「何が？」
「何がじゃないだろ、殴っただけなら生きてるんじゃないのか？」
「おう、生きてたぞ」
生きてたぞ、じゃないだろあほうが。
「止めさすぞ」
「あいよー」
「ちょっと可哀そうですにゃ……」
ミーニャの気持ちも分からなくはないが、これぱかりは仕方がない。ここで逃がせば誰かが襲われることになるのだから。
横っ腹を見せ、倒れこんでいる猪もどきに寄って行く。猪もどきは俺たちに気づくものの、動けないらしく、荒く息をついて見ているだけだった。
「近くで見るとやっぱでっけーな」
「抵抗する気はないみたいですにゃ」
というか、立ち上がれないだけだろ。足が短かすぎる。
さて、あまり気は進まないが一思いにやってしまうか。
俺は鞘から刀を抜き、構える。
「やっぱり可哀そうですにゃ……」
「そういうことを言うな、意思が鈍るだろ」
「ご、ごめんないですにゃ」
俺だって本当は殺したくはない、でも、こいつが人を襲う以上はここで止めを刺しておくべきなんだ。もちろん、それが人間のエゴ

だということは俺も理解しているつもりだ。
「なあ、キキ、こいつ、飼おうぜ」
「……は？」
いま、なんつった、横のあほうは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9375x/

キキとあほうとにゃ

2011年12月17日08時56分発行